

ホテル東光園本館

ホテルとうこうえんほんかん

鳥取県米子市



ホテル東光園正面外観

見どころ

昔、出雲大社にお参りする時、皆生の中でも東光園にしかない「よみがえりの水」で体を清めまた、三杯飲水することに、今までの邪念を浄化し、魂をよみがえらせた、という言い伝えが受け継がれている。その言い伝えにより、東光園は「出雲大社」をモチーフにして設計されている。地面から6階の上にかけられた巨大な梁をフロント正面ロビーの真ん中に位置する柱で支え、その巨大な梁から5階、6階の床が吊るされている。正面より東光園に入ると視線はガラスの向こうに広がる庭園へ釘付けとなる。実は1階もピロティになっている。

客室は畳敷きの落ち着きのある和室。窓外には靈峰大山と見事な庭園が広がる。



日本の様式美と西洋の機能美が心地よくとけあう寛ぎの空間となっている。



天皇・皇后両陛下をはじめ皇室の方々が幾度となくご宿泊になった貴賓室があり、また、広大な日本庭園の一角に数奇屋造りの離れの間が、昔ながらの姿で佇んでいる。本館に限りお気軽に見学にお越し下さいとのこと。宿泊は伝統の日本建築が語りかける和の心に包まれ、非日常を堪能されてはいかがでしょうか？



東光園本館は、山陰地方における建築家菊竹清訓氏の代表作の一つとして、1964年に竣工した。この建築の特徴は、6本の組柱によって、高く持ち上げられた大梁から2枚の客室階の床を吊るという主構造にあり、世界的にこれが初めて最後といわれる建築様式（二段ピロティ形式）を用いている。主柱、貫、添柱という厳島神社の鳥居にみられる木造建築の架構をコンクリートで大胆に表現している。ガラスの階段室や最上階のスカイルームの十字架構とH Pシェル屋根など見所満載である。皆生温泉は、山陰の三名湯の一つでもあるため、源泉かけ流し湯や四季折々の山海の美味を楽しむことも出来る。文化財に宿泊できる宿として数少ない宿泊施設である。

【ロビー】

前面ガラス張りのロビーの窓から見えるのは世界的彫刻家 流政之氏が作庭した3000坪の広さを誇る日本庭園である。



【東光園七庭】

芸術家の研ぎ澄まされた感性が、惜しみなくそぞぎ込まれた日本庭園。その美しい光景は、粋を知る日本の心そのものである。



【空中庭園】

4階にあたる部分を正面から眺めると建物にぽっかり穴が開いたように見えるこの異質な空間が「空中庭園」である。



【スカイルーム】

7階、全面ガラス張りのスカイルームからは大山、日本海、米子の町が一望できる。



【ギャラリー】

1階ギャラリーには東光園の構造など良く分かる模型や資料が展示されているが、東光園はその建物自体が美術館となっているともいえる。



建物名称

ホテル東光園本館「天台」

建築年

1964年（昭和39年）

構造・様式

SRC造吊り下げ構造 地上7階地下1階

所在地

〒683-0001 鳥取県米子市皆生温泉3-17-7

電話

0859-34-1111

H P

<http://www.toukouen.com/>

アクセス

米子鬼太郎空港よりタクシー、車で約30分

備 考

JR米子駅よりタクシー、バスで約20分

国登録有形文化財

塩谷定好写真記念館

しおたにていこうしゃしんきねんかん

鳥取県東伯郡琴浦町



記念館外観

見どころ

生涯に渡って山陰の自然や人を撮り続けた写真家・塩谷定好の写真記念館。アメリカやヨーロッパで個展を開催するなど、国内外で世界的に高く評価された写真家。明治初期の商家である生家を改装した写真記念館には、ギャラリーはもちろん、生前の愛用品や生活ぶりを感じられる品々を見ることができる。



【螺鈿仕上げの違い棚】

2階の10畳和室の床の間は、違い棚が螺鈿(らでん)仕上げとなっている。趣向を凝らした材など見ごたえ



【ギャラリースペース】

白を基調とした和モダンな空間。
ギャラリーは年に2度、季節に合わせた作品の掛け替えがあり、県内外問わずファンが幾度も訪れる。



【正面玄関】

一歩足を踏み入れると、懐かしい雰囲気に包まれる。地域の文化拠点でもあり、地元の方の生け花や作品展、和紙明りの展示なども催される。

【愛機の展示】

定好氏の愛機もギャラリーのいたるところに展示されている。



【米蔵を改装したカフェ】
素敵なお庭を眺めながら、併設しているカフェでゆったりとお茶を楽しみませんか♪

建物名称

塩谷定好写真記念館

建築年

明治39年

構造・様式

木造2階建・商家建築

所在地

〒689-2501 鳥取県東伯郡琴浦町赤崎1568

電話

0858-55-0120

H P

<http://teiko.jp/>

開館時間

9:00~16:00

アクセス

JR赤崎駅下車 徒歩約20分、琴浦町駐車場

備考

国登録有形文化財

鳥取いなば有隣荘

とつりいなばゆうりんそう

鳥取県鳥取市



池泉回遊式庭園

見どころ

現在客室として利用されている各和室はそれぞれに特徴がみられる。座敷十畳（佳友の間）は一間の床の間と違い棚に平書院を持ち、天井棹縁は床差である。柱は杉面皮、床柱は黒檀、床框は黒檀等の銘木を多用し主屋の座敷として相応しい。長押は松材で米原家家紋の木瓜紋の釘隠しが打たれる。離れ十畳（簡堂の間）は床が一段高く、用材は梅が多用されており、一間半の床の間・違棚・付書院を持ち、天井棹縁は床差である。長押を内法と天井下に入れ、菊紋の釘隠しを打ち、付書院に透かし彫りの欄間を有す。茶室は二畳中板胴庫付で台目幅の床を持つ。床柱は皮付き赤松の丸物、茶道口踏込の隅柱は竹、塗り残しの丸窓をあける。水屋は三畳間と茶室茶道口に繋がる廊下脇に設けられている。照明器具は建築当初のもので大正期のモダンな和風意匠で、電線を接続しない引っ掛け式となっており、正式な茶会の時等には簡単に取り外すことができる。

鳥取県の富裕層の近代和風の大邸宅としての特徴を示し造形の規範となっている建造物である。



有隣荘は元は鳥取平野南部邑美郡国安の西尾家の旧宅であった。明治以降は鳥取県東部地域屈指の資産家で名門とされた家柄である。国安は平安期まで遡る集落と推定されるが千代川の氾濫原で度々位置を変えている。大正7年の大洪水を機に新しい堤防が村内西寄りを南北に縦断することになる。

西尾家を含む集落過半の120戸が集落の東側に接して集団移転することとなり、大正8年に着工し大正14年完成した。

昭和36年米原家の所有となり玄関とホール部分を改装した。鳥取市名誉市民で貴族院議員を勤めた米原章三は晩年ここを好み有隣荘と名付け居住した時期がある。昭和60年鳥取県で開催された国体の時に高松の宮の行啓に際し、建具の一部取り替えと主屋北側に「高松の間」を増築し、その後は一般にも開放。現在は会席料理等食事の場として、また茶会、婚礼会場等として広く利用されている。



玄関前の佇まい

【庭園】

八坂山を借景とした心字池を廻る池泉回遊式庭園で上方の庭師の作庭とされ、大ぶりの石と踏分石を多用した近代和風庭園である。農家の平面の主屋に旧藩主池田家拝領と伝わる離れ等数棟を庭に雁行して配置し、庭園と建築が内外共に一体となって美しい調和を成している。

【梅の間】

「梅の間」は木造平屋建て桟瓦葺（黒褐色旋釉）入母屋造りで主屋の最も奥にあり、庭園側南より六畳間・三畳間・茶室が並ぶ。東西に棟を並べ雁行する建築群の中で、棟を南北に向け庭園側にやや低めの入母屋の妻側を見せ、独立した離れとして外観に変化を与えている。六畳間は、柱・長押・鴨居・床柱・落掛・付書院棚等ほぼ全ての用材は梅の柾目の良材が多用されている。茶室に繋がる廊下の四間に及ぶ梅柾目の長尺板は見せ場である。一間の床の間と床脇には地袋と黒漆枠の火灯窓を設け、襖は金が縫い込まれた瑞雲の模様で、有隣荘では最も古いながらも他の座敷や離れと趣を異にして華やかな室内空間を演出している。



梅の間

【食事】

昼食は、有隣御膳 3,000円～
夕食は、会席料理11,880円～
その他、お茶会・催事等
※全て予約が必要

※建物の案内・見学付き

建物名称 鳥取いなば有隣荘

建築年 大正14年

構造・様式 木造平屋建て

所在地 鳥取県鳥取市国安895

電話 0857-53-2686

HP <http://www.yurinsou.com>

開館時間 昼食：11時半～14時 夕食：17時半～21時

予約制、不定休

アクセス 鳥取駅から車で10分 駐車場あり

備考 国登録有形文化財

小泉八雲旧居

こいづみやくもきゅうきょ

島根県松江市



門をくぐるとそこは静謐な空間。白い障子が美しい

見どころ



書斎から庭を望む

『怪談』『知られざる日本の面影』の筆者である小泉八雲(本名ラフカディオ・ハーン)がこの家に暮らしたのは明治24年(1891)6月から11月である。
ニューヨークの出版社の記者として来日したハーンはすぐさま島根県松江市の尋常中学校と師範学校の英語教師として着任した。そこで「へるん先生」と呼ばれ親しまれた八雲が日本人の妻であるセツと結婚後、松江での第三の住処としたのが旧土族根岸千夫の留守邸であった。



建物は享保年間の築とも言われており、松江城を囲む城山稻荷の森と濠に面している。背景には赤山を従え、現代の今も尚、季節の移ろいを色濃く感じるエリアの中にある。
長く高い塀に囲まれたこの家の門を潜り石段を上ると、そこには白い障子に囲まれた玄関が端正な顔を見せている。



この家は庭に囲まれた家である。
八雲は旧居をぐるりと取り囲む庭と、そこに暮らす「有情のものたち」小さき生物をこよなく愛した。



書斎北西面

書斎は元茶室に準じて作られたと言われている。
様々な物語がこの家で妻セツの口から語られ、八雲の手で物語となって紡がれた。



南庭は建物正面から西側に建物を取り囲み、北庭へと連続する。
庭に配された灯籠や手水鉢、様々な形の岩なども八雲は好んで描写している。

南庭



昆虫や蛙、小さな生物が日々見せる姿を八雲は愛した。
池に棲む蛙を守るために食べ残りの肉を皿のまま石段に置き、家中でイタチや蛇から蛙を庇ったと伝えられている。



書斎から眺める蓮池を八雲はとりわけ気に入っていた。
家の描写と庭の描写は著書にも繰り返し登場する。
塀と植物によって外の世界と遮蔽されたこの世界は今もそこにあり、八雲が愛した日本の姿を訪う人に今も伝えている。

建物名称

小泉八雲旧居

建築年

1905年(明治38年)建築/1912年-1925年(大正期)増築

構造・様式

木造瓦葺平屋建

所在地

島根県松江市北堀町315番地

電 話

0852-23-0714

H P

<https://www.matsue-castle.jp/kyukyo/>

開館時間

8:30~18:30 (10/1~3/31日17:00)

ア クセス

松江駅からバスで約20分

備 考

史跡名勝天然記念物

旅館美保館本館

りょかんみほかんほんかん

島根県松江市



美保関は古くから海上交通の要として栄えてきた。

朝鮮半島や環日本海交易の拠点として繁栄。

江戸から明治にかけては北前船の寄港地として栄え廻船問屋が軒を連ねた。

美保館を営む定秀家は源平合戦の東の将、松田十郎藤原定秀が石橋山の戦いに敗れ、美保関に定住したのが始まりとされ、四十一代定秀寛一・ナツ夫婦が美保関で初めての旅館である美保館の営業を開始している。



見どころ

美保館本館の見どころは何といってもアトリウムを囲む吹抜空間。

そしてそれを囲む回廊に設えられた様々な座敷や小部屋。その連続性が生み出す変化に富んだ景色の面白さにある。



欄間・障子・丸窓。
部屋毎に様々な意匠が凝らされており、当時の大工や指物師の高度な技術と遊び心を垣間見ることが出来る。

トップライトからの日差しが凛とした影を落とす昼間も、アトリウムを挟む部屋の障子が淡く染まる夜の姿も。それぞれに美しく、是非どちらも堪能することをお奨めしたい。

美保関神社から続く青石畳通りは、海石を切り出して作られた石畳の路で、雨の日は石畳みがうっすらと青く輝き、一際美しい。

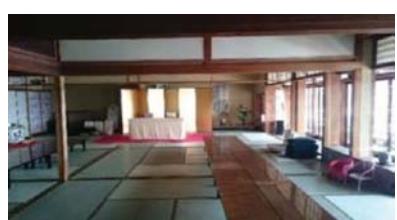
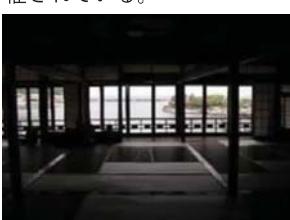
通りを挟んで海側に美保館本館、山側に二代目美保館が佇み、青石畳通りの風情を作り出している。



石畳通りに面した入口をくぐると、格子天井の重厚感ある玄関空間の向こうに、思いがけず明るい空間が広がっている。昭和4年に当初中庭だった空間をガラス天井のアトリウムに改築。

アトリウムを囲んで張り巡らされた廊下と階段、趣向を凝らした数寄造りの部屋や空間は訪れる人を日常から離れた異空間へと誘う。

アトリウムを含むこの空間ではコンサートや講演会など様々な催しが開催されている。



建物名称 旅館美保館本館

建築年 1905年(明治38年)建築/1912年-1925年(大正期)増築

構造・様式 木造瓦葺二階建

所在地 島根県松江市美保関町美保関573

電話 0856-73-0111

H P <http://www.mihokan.co.jp/>

開館時間 旅館として営業中(見学可能/会合・会食・宿泊は要予約)

アクセス 松江駅からバスで約80分(乗り換え有)

境港駅からタクシー15分(又はバス40分~1時間)

備考 国登録有形文化財

旧堀氏庭園 樂山荘客殿

きゅうほりしていん

らくさんそうきやくでん

島根県鹿足郡



津和野町中心部から約10km上流の畠迫地区。
堀家は代々、銅山年寄役を世襲し、天領差配家として三百
年の歴史をつないできた名家。経営の繁栄に従って本宅を
中心に庭園や学校、病院などを建設し、歴史的・文化的・
景観的に価値の高い建造物や遺構を数多く残している。

※



※「津和野町教育委員会」所蔵

見どころ

樂山荘客殿は、書院造を基調にしながらも、各室で意匠を
凝らした数寄屋風の座敷からなる。多様な材の取り合わせ
の巧みさや、ハツリ目(つけ方)など数寄屋や茶室などの作
事を得意とした大工によることがうかがえる。



■1階主座敷 床柱は赤松の皮付

使われている材料や、欄間、障子、目に入るもの全てが
魅力的なものとなっている。



■2階主座敷
床柱は北山杉天然絞り丸太

漆喰仕上の土塀は東西に100mを超える。屋敷地内の主屋と客殿とは小
さな庭門で区画されており、客殿と庭園による、まさに庭屋一如である。
一年を通じて美しい景観を作り出しているが、その中でも秋の庭園
は絶景。この屋敷対面にある「和楽園」周辺地を含んだ約6.5haの範囲が
が国の名勝に指定されている。



1階主座敷
から中間域
を通した
新緑の庭園
薄暗い空間
座して身を
休める



2階障子越しに見える
紅葉の景色
美しさが客
をもてなす

※

建物名称	(堀氏旧宅) 樂山荘客殿
建築年	1897年(明治30年)上棟 1900年竣工(明治33年)
構造・様式	木造瓦葺二階建
所在地	島根県鹿足郡津和野町邑輝795
電 話	0856-72-0010
H P	http://tsuwano-bunka.net/horiteien/
開館時間	9:00~16:30
アクセス	津和野駅から町営バス長野行き約20分、堀庭園下車 P 有
備 考	月曜休館日※11月は無休 月曜が祝日の場合翌日が休み

いかしの舎

いかしのや

岡山県都窪郡早島町



長屋門

いかしの舎喫茶

い草の町として、また、金毘羅往来の地として、昔から経済・文化とともに隆盛を極めた早島。その長い歴史は、早島に独特の文化的土壤を培い、誇り高い町民性をはぐくんでいた。「いかしの舎」は畠表・経糸（たていと）の問屋で当時の繁栄を物語る代表的町屋・寺山家を改修した建物で、早島に受け継がれた遺産を保存しながら、新しい文化を創造する拠点として今に蘇らせたものである。

「五十櫓舎（いかしのや）」とは、明治期の歌人で岡山市に在住した岡直盧（おかなおなり）がここを訪れた際、寺山家に対して命名したもので、「盛りに足りておごそか」という意味である。

見どころ

往時をしのばせる貴重な建物でありながら、多目的文化交流の施設として、美術展示会、ミニコンサート、茶会、食事会、法要、ウェディング等、幅広く活用されている。建物はすべて自由に見学でき（貸し切り時を除く）、四季折々の姿を見せる庭を眺めながら、茶房にてゆっくり食事やお茶を楽しむこともおすすめしたい。



母屋1階座敷



母屋1階座敷



長屋門



いかしの舎喫茶



母屋1階座敷

【長屋門（ながやもん）】

現在は県道となった、金毘羅往来に臨む。

1・2階にそれぞれ12畳・20畳の和室を備え、ヨガ教室やフラワーアレンジメント教室等に利用されている。



母屋玄関より表庭を見る



2階大広間



中庭（露地）



中庭から見る竹坪庵

【竹坪庵（ちくへいあん）】

母屋から、渡り廊下でつながる離れた茶室。

平成4年の改修時、京都より移築。古田織部の作と伝えられる四疊台目茶室「八窓庵（はっそうあん/明治24年、興福寺の大乘院庭内より奈良国立博物館中庭へ移築）」の写しである。

母屋からいったん中庭へ降りると、腰掛待合へとつながる露地が設えられており、世俗を離れ清浄無垢の精神に至るという茶の湯の心を感じることもできる。

建物名称

いかしの舎

建築年

明治末期（1992年に改修）

構造・様式

木造2階建て

所在地

岡山県都窪郡早島町早島1466

電話

086-483-1243

H P

<http://www.town.hayashima.lg.jp/ikashinoya/1456464734836.html>

開館時間

AM9:00～PM5:00（月曜日休館）

アクセス

JR瀬戸大橋線早島駅から徒歩12分

瀬戸中央自動車道早島ICから車で2分 駐車場あり
見学は無料。部屋使用は有料。

脇本陣 木代邸

わきほんじん きしろてい

岡山県真庭郡



木代邸外観

脇本陣木代家は、出雲松江藩松平氏の参勤交代の往来の宿場として栄えた新庄宿で脇本陣をつとめた家である。屋号を「向馬場屋」と称し、江戸時代の終わり頃に建てられた幕末を代表する建物で三列六間取りの大規模家屋である。入口の柱には馬つなぎの環が備えられ、またトイレには今でも刀掛けが残っており、江戸の風情を今に伝える大名旅籠である。木代邸はがいせん桜通りに面しており、家並みの前には残したい日本の音100選に選ばれた涼しげな音色を奏でる美しい小川があり、地域の人々の生活用水として大切にされている。



木代邸 玄関先の小川の水車



木代邸 内部

見どころ

脇本陣の木代は分家である。本家木代は出雲の尼子氏に仕え、尼子氏の出城である新庄沢城主吉田修理の家臣であった。尼子氏が滅ぶとともに、武士を捨てここに農民として宿場の町並みに居を構えたのである。

敷地内にある施設は自由に見学できる。明治時代に醤油製造を行っていた蔵を改造したさくら茶屋では郷土料理を堪能できる。桜の時期に訪れるをお勧めする。

木代邸中庭には新庄村の歴史を感じることのできる展示スペース「史記庵」があり、出雲街道新庄宿、がいせん桜、脇本陣木代邸についての資料が陳列されている。



親子格子



廊下の丸窓



蔀戸



刀掛け

蔀戸（しとみど）は、通常外に面した開口部に設けるが室内にある蔀戸は県下でも珍しい。



がいせん桜は、1906年に日露戦争での戦勝を記念して旧出雲街道宿場町の両側に植えられた桜の通称。毎年桜の開花期にがいせん桜まつりが開催される。「岡山県で最後の桜の名所」として有名である。

【木代邸】

木代邸は切妻平入り中二階の建物で、屋根は石州瓦の棟瓦葺で赤茶色の独特の色合いである。外壁は白漆喰仕上げの塗壁造り、腰壁は下見板張りで鎧伏せの黒っぽい板張りで、壁の白さとの対比が美しい。部屋は表側に店の間、玄関の間、奥の間があり、裏側に居間、中納戸、奥納戸の三列六間取りである。さらに囲炉裏の間、湯殿、廁とある。囲炉裏の間は板張りの部屋で、囲炉裏が二か所もある珍しい造りとなっている。雪が降り積もる厳しい冬に峠を行き来する者にひとりでも多く、一刻も早く暖を取ってもらいたいという配慮を感じることができる。



史記庵



囲炉裏の間

建物名称

新庄宿 脇本陣 木代邸

建築年

安政4年

構造・様式

木造二階建て

所在地

岡山県真庭郡新庄村中町1107

電 話

0867-56-2626 (新庄村役場代表)

H P

<http://www.vill.shinjo.okayama.jp/index.ph>

開館時間

新庄村教育委員会へ問い合わせ

アクセス

桜茶屋は春以外は予約すれば飲食可能

備考

JR姫新線 中国勝山駅／中鉄バス40分

米子自動車道 久世IC／40分、又は蒜山IC／25分

新庄村有形文化財



【延養亭（えんようてい）】

藩主の居間で、園内で最も重要な建物だったが、戦災で焼失し、昭和三十五年に当時第一級の木材と技術で築庭当時の間取り「御茶屋御絵図」を元に復元された。築庭当初から現在の位置に建てられ、藩主の座る主室からの眺めが最も美しくなるように、庭園が作られている。現在もこの景観の保全につとめている。沢の池、唯心山、借景の操山と、園内外の景観が一望できる、後楽園の中心的建物である。現在、期間限定で一般公開がある。また、お正月や月見などの年中行事の時には、琴の演奏が催される。

延養亭には隣接する茶室「臨い軒」がある。天井に龍の絵が描かれていることから「龍の間」とも呼ばれている。戦争で焼失し、延養亭とともに復元された。現在の龍の絵は、倉敷市出身の日本画家池田遙邨によって、描かれたものである。(※「臨い軒」は非公開)

【島茶屋（しまちゃや）】

園内最大の池である「沢の池」の中の島にある茶屋である。園路より西に向かって太鼓橋を渡りる。通常は一般公開されていないが、茶室として人気の貸し出し建築物である。

板の筋違い橋で繋がっている御野島には釣殿があり備前焼の鶏が寄棟の棟上に置かれている。(御野島への一般見学は不可)



島茶屋

見どころ

非常に洗練されたシンプルな室内。障子を開けると素晴らしい開放感と美しい景色は時を忘れるほどである。治政は茶道を好み、書画、俳句などにも秀でていたが、特に大文字の名人として知られていた。写真の掛け軸は「致遠(ちえん・遠きを致す)」(延養亭)



延養亭 床の間と池田治政の書



延養亭 藩主の座る主室からの眺め

4畳半に床ノ間、床脇付。東に、2畳と直角3角形の板間付。4畳半は、腰付障子で南と西が開放され、障子の外には、濡れ縁が廻る。濡れ縁には、南側に切石の、西側に自然石の沓脱石が配置されている。東側 2畳半大の室の東壁面は、5尺2枚割の腰付障子で、勝手口だったと思われる。3角形の板間の斜辺に廻る壁面には、丸窓が添えられている。4畳半からは、南の唯心山から西の延養亭、2畳半の丸窓からは、東南の流店、千入の森、桜林、梅林、が眺められる。基礎は沓石、根回り竹横木下は差石。(島茶屋)



島茶屋 室内から沢の池の眺め



島茶屋 室内続く竿縁



島茶屋 丸窓



島茶屋 沢の池南岸からの眺め

【庭園】

岡山後楽園は、江戸時代を代表する大名庭園の一つである。延養亭や能舞台を中心とした亭舎、園内各所に置かれた茶室や祠には、歴代藩主の思いが込められている。

広い芝生地や、池、築山、亭舎が園路や水路で結ばれ、歩きながら移り変わる景色を眺めることができるよう、工夫された庭園である。通年四季折々の景観に合わせた、趣向を懸らせたイベントで賑わう。春と夏と秋には人気のイベント、夜間特別開園「幻想庭園」が開催される。

[ウメ(梅)]時期:2月上旬～3月上旬

[サクラ(桜)]時期:3月下旬～4月上旬

[ツツジ]時期:4月中旬～5月下旬

[ハナショウブ(花菖蒲)]時期:6月上旬～6月下旬

[バス]時期:6月下旬～7月下旬

[紅葉]時期:11月中旬～12月上旬

[芝を大量に使った庭]日本に広く自生している野芝を使った明るく広々とした庭園である。築庭当時、芝は沢の池西側の延養亭から見える範囲にだけ使われ園内の大部分は田畠であった。その後、田畠の削減に伴って芝生地が広がり、園全体に使われたのは明治以降。

[曲水]昔は旭川の約4km上流から対岸まで引いた後楽園用水を利用していたが、今は伏流水をくみ上げている。その水を池や滝に上手に利用し、優れた水の景観を作り上げている。



延養亭 室内からの眺め



入り口付近から沢の池と島茶屋の眺め

建物名称

後楽園 延養亭・島茶屋

延養亭（昭和35年復元）・島茶屋（不明）

建築年

木造平屋建

構造・様式

岡山県岡山市北区後楽園1-5

所在地

086-272-1148

電 話

<http://okayama-korakuen.jp/>

H P

3月20日～9月30日午前7時30分～午後6時
10月1日～3月19日午前8時～午後5時（年中無休）

開館時間

J R 岡山駅から徒歩25分 駐車場有

アクセス

特別名勝

備 考

由加山 蓮台寺 客殿 通天橋

ゆがさん れんだいじ きやくでん つうてんきょう

岡山県倉敷市



境内よりを通天橋を望む

日本三大権現のひとつ、瑜伽大権現をお祀りし、厄難、災いを払う、厄除け祈祷を行っている。「厄除けの寺」として知られている由加山蓮台寺は、桜のシーズンになると境内は数千本の桜が咲き誇りピンク色に染まり美しい。特に境内にある双樹満願桜は有名で、多くの参拝者が訪れる。



通天橋室内

見どころ

由加山は、江戸時代には四国の金毘羅大権現と両参りが盛んであった瑜伽大権現をお祀りする蓮台寺の御山である。3万坪の境内には観音堂、権現堂、大師堂、多宝塔など数多くの建築物があるが、中でも備前藩主池田侯の参拝時に使用された蓮台寺客殿は県指定重要文化財で、円山応挙の竹鶏の図をはじめ108点の貴重な障屏画があり、江戸時代にお殿様が宿泊参拝した様子をうかがい知ることができる。

皇室の方が座られた御成の間は、中段、上段の間に加え上々段を設けた造りで、現存するものでは松島の瑞巖寺と由加山蓮台寺の2箇所のみである。

また、上段の間正面に掲げられた掛軸は備前藩主の直筆の作品で、「蓮台寺」の三文字が書かれている。

客殿の奥には四季折々の風景を楽しめる庭園が広がっており、庭園を眺めながら頂ける精進料理コースを申し込みゆったりと拝観されることをお薦めする。



庭園



御成の間



孔雀の間



傾斜の階段



階段内部



通天橋から窓を眺める（桜の絵屏風）

【通天橋】

本殿と客殿を結ぶ通天橋は、桜の時期には無料で入ることができます。通天橋の窓からは満開の桜が絵屏風のように見え、参拝者の心を麗してくれる。壁に飾られた絵画やピアノ演奏を楽しむことができ、芸術文化の交流フロアにもなっている。

通天橋の奥には備前焼の水瓶が展示されており、季節の草花が拝観者を優しく迎えてくれる。

精進料理を申し込むと客殿を拝観することができ、総本殿にて蓮台寺説明とお清めをうけ、県重要文化財である客殿拝観の後に四季折々の逸品膳を堪能できる。

また大茶盛は奈良西大寺の僧叡尊が正月行事の終わりに1年の健康を念じたお茶を民衆に振舞ったことに由来しており、蓮台寺はその西大寺より唯一認可を受けたお寺である。大きなお茶碗で一服。心静に悠久の時を味わうことができる。



備前焼の水瓶



大茶盛



庭園

建物名称

由加山 蓮台寺 客殿

寛政年間（1700年頃）完成

客殿：木造二階建て

所在地 岡山県倉敷市児島由加2855

電 話 086-477-6222

H P <http://yugasan.jp/>

開館時間 9:00～16:00

アクセス JR瀬戸大橋線「児島駅」よりタクシーにて約15分

瀬戸中央自動車道「水島IC」より約10分 駐車場有

客殿 岡山県指定重要文化財

県指定重要文化財の「客殿」にて精進料理をお楽しみいただけます。

特別史跡 旧閑谷学校

とくべつしせき きゅうしづたにがっこう

岡山県備前市



泮池より鶴鳴門・講堂を望む

閑谷学校は、江戸時代に岡山藩主池田光政によって創設された庶民のための公立学校である。その姿はほぼ建築当時のままであり、慌ただしい日常生活とは一線を隔す麟とした佇まいを保っている。創学の精神は形を変えつつ現代に受け継がれ、岡山県内外の生徒が研修に訪れる現役の教育の場である。



講堂（国宝）

見どころ

うねるよう連なる765mの石壠に囲まれた敷地内には、閑谷学校の中心的建物である講堂はじめ、鶴鳴門と呼ばれる正門、孔子像を納める聖廟、池田光政を祀る閑谷神社など備前焼の瓦を用いた精工な造りの建築物が並び立ち、2本の楓の木が四季おりおりの色をまとう様は壯観である。

なお、現在は資料館として使用されている旧閑谷中学校本館は明治時代の校舎であり、納められている資料とともにゆっくりと時を過ごしてほしい空間である。



講堂内部



石壠



椿山



紅葉した楓の木



備前焼の瓦

【講堂・小斎】

桁行7間、梁間6間、一重入母屋造、備前焼の瓦を用いた鎌葺の屋根をもつ。内部には10本の丸柱に囲まれた内室とそれを取り囲む入側があり、柱と床は拭漆仕上げである。鏡のような床は周辺の自然の色をとりこんで季節により表情を変える。講堂の南側には小斎と呼ばれる一重入母屋造、こけら葺の簡素な造りの建物があり、内部には四畳半二間と浴室が備えられている。藩主が閑谷学校を訪れた際に使用された建物で、子ども達が勉学に励む様子を眺めた様を想像すると当時の藩主の教育への想いが伝わってくる。小斎には質素ながらも床や炉があり、窓から見える借景の山々は見事である。

【習芸斎・飲室】

講堂の西側に連なる建物で、習芸斎は教室、飲室は休憩室である。飲室には石を用いた炉があり、冬場に炭で暖をとったり、湯を沸かしてお茶を飲みながら師匠と生徒が交流をもった空間である。

【椿山】

閑谷神社の東には椿がうっそうと生い茂る小道があり、その先の小山には池田光政の髪などが納められている。椿に囲まれた空間は不思議と心落ち着く空気を醸し出している。



黄葉亭

【黄葉亭】

閑谷学校から500mほど山あいの小道を歩くとみえてくる、四畳半一間の閑静な茶室であり、来客をもてなすために使用されていた建物である。小川の合流する土地に文化10年（1813）につくられ、ひっそりと佇む様は時の流れが止まっているかの様である。黄葉亭にたどり着くまでの小道には、池田光政の命をうけ学校建設に携わった津田永忠の宅跡があり、当時と変わらぬ静かな山間の景色を楽しむことができる。

建物名称

特別史跡 旧閑谷学校

建築年

寛文10年（1670）～元禄14年（1701）造営

構造・様式

講堂：木造一重入母屋造本瓦鎌葺（備前焼瓦）

所在地

岡山県備前市閑谷784

電話

0869-67-1436

H P

<http://shizutani.jp>

開館時間

9:00～17:00 休館日：12月29日～31日

アクセス

JR山陽本線吉永駅下車タクシーで約8分 駐車場有

JR赤穂線備前片上駅下車タクシーで約10分

備考

特別史跡（旧閑谷学校） 国宝（講堂）

重要文化財 登録有形文化財（閑谷学校資料館）

重森三玲意匠書院復元

しげもりみれいんしょいんふくげん

岡山県岡山市



書院全景



特筆すべき見どころはなんといってもこの襖であろう。変形の激しかった骨組みは新たに作られており、損傷していた襖紙は復元されている。襖紙は、縁を外した部分に残る当時の色合いを手掛かりに京表具師の手によって再現された。復元に使用された紙は、昭和50年代の桂離宮改修で使用されたものである。三玲の憧憬の的であったであろう桂離宮と同じ材料が使われたという点も興味深い。

独特な色合いの市松模様と、その前面を流れる雲のような不思議な模様は、眺めているとさまざまな形に見えてきて飽きることがない。その模様の中につく引き手は七宝焼きで、美しい模様が描いてあるという。

復元によって当時の色合いを取り戻した襖が、藍と銀箔の大柄な模様というある種現代的な佇まいだからこそ、どんな作品とも折り合う空間を造りだしていると感じられる。

この書院のある岡山県立美術館は、昭和63年に開館した岡田新一設計の建物である。建物はもちろんのこと、毎回充実した内容の企画展、常設展を和の空間とともにぜひ鑑賞していただきたい。

参考文献：岡山県立美術館 重森三玲展 パンフレット

岡山県立美術館の二階展示室の一角に、作庭家重森三玲意匠の書院がある。この展示室には古い時代の掛け軸から新進気鋭の作家の現代的な作品まで、さまざまな種類の作品が並べられる。そのすべてを受け入れるだけの寛容さがこの書院にはあり、それこそが和の空間が持つ魅力だと思うのでここに紹介したい。

重森三玲は、岡山県吉備中央町出身の作庭家・庭園史家である。18歳にして自宅に茶室を設計し、上京後もいけばな、日本画、庭園などについて造詣を深め、京都市東山区にある東福寺の「国指定名勝 東福寺本坊庭園」を皮切りに多くの庭園を完成させる。

岡山県吉備中央町に重森三玲の姉妹が住んでいた民家があり、その民家に三玲によって設えられたこの書院が岡山県立美術館に復元されたのは2009年のことである。建物、内部とも痛みが激しかったため、部屋全体は実測のもと作成された図面をもとに新たに作成されたが、重森三玲らしいデザインの襖、障子、違い棚などは持ち主より美術館へ寄贈され、修復された。

6畳に床の間、違い棚がついている空間は、住宅の中にあるとそれはごく普通の風景だが、美術館の展示室の一部にあると縁側も含めると思のほか広く感じられる。中まで立ち入ることはできず、展示スペースの一部として和の空間を味わうという趣である。日本画の展示の際には床の間に掛けられる軸はよりリアリティをもって鑑賞することができ、焼き物の展示の際にはその焼き物が日常に溶け込む様子が想像でき、今回の取材時のように現代アート作品の展示の際には、その作品が書院を含めて成り立つ様子に感嘆させられる。



取材当日は太田三郎氏の作品が展示中であった。作品名：Milk
書院も表現の一部として取り込んでいる。

建物名称	重森三玲意匠書院復元
建築年	2009年
構造・様式	—
所在地	岡山県岡山市北区天神町8-48 岡山県立美術館内
電 話	086-225-4800
H P	https://okayama-kenbi.info/
開館時間	9時～17時（入館は閉館30分前まで）
アクセス	JR岡山駅後楽園口（東口）から徒歩15分 地下駐車場：38台（近隣有料駐車場有）
備 考	月曜日、年末年始、展示替期間中は休館

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）

きゅうひろかねけいゆうたく（つうしょう：ひろかねてい）

岡山県高梁市



楼門づくりで城郭にも劣らない堂々とした石垣は、高さが15m、長さが100mあり、今もそのままに当時の富豪ぶりをたたえている。駐車場からの眺めは圧巻で、映画のロケ地としても知られている。

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）は享和・文化の頃、小泉銅山とローハ（硫化鉄=ベンガラの原料）の製造を営み、巨大な富を築いた大野呂の庄屋・広兼氏の邸宅で、お城のような石垣と主屋・土蔵3棟・楼門・長屋は江戸末期に建設された。庭園には水琴窟が設置されていて、規模、構造とも雄大な城郭を思わせる構えで当時の富豪の姿を偲ばせている。



石垣に沿ってスロープを上がった先に楼門があり、門の上には不寝番部屋が設けられている。主屋の正面屋根では逆立ちした狛犬も侵入者に睨みをきかせている。



楼門

屋根上の狛犬

見どころ

広兼邸は山を背負うようにそびえ立つ大邸宅である。春は桜、秋は紅葉した山に包まれ、また庭に植えられた様々な木や花によって、季節ごとにその表情を変える。

毎年5月にイベント「広兼邸 花めぐり」が、離れ座敷と衆楽園で開催されている。庭からでも鑑賞できるが、イベントの期間中は普段上がることができない座敷に上がって生け花を鑑賞できるチケット（お茶とお菓子付）も販売される。



離れのお茶室



土蔵の展示品

広兼邸から4kmほど山道を行くと突如、赤銅色の石州瓦とベンガラ色の外観で統一された、見事な町並みが現れる。ここが国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている「吹屋の町並み」である。



吹屋の特異な点は、豪商個々の屋敷が豪華さを纏うではなく、且那衆が相談の上で石州（今の島根県）から宮大工の棟梁たちを招いて、町全体が統一されたコンセプトの下に建てられたという先進的な思想にある。旧片山家住宅（国指定重要文化財）、旧吹屋小学校（県指定重要文化財）などの見どころも多く、広兼邸と合わせて、山あいの町並みにもぜひ足を延ばしていただきたい。

本邸だけで323m²（約98坪）あり、離れ座敷・土蔵・楼門・長屋まで入れると全部で723m²（約220坪）56部屋ある。また、邸宅の向かいには明治初期、広兼氏個人の神社として天広神社が建てられた。境内は庭園風となっており、衆楽園と呼ばれている。



本邸の庭に面した座敷は、手前から客間、玄関、店の間、控間、さらに台所と続く。



水琴窟

本邸の隣に佇む離れ座敷は大正時代に建設され、当主の婚礼に一度だけ使用された。床の間や襖も素晴らしい、お茶室・化粧部屋・客間・風呂等を備えている。離れの奥にある土蔵には、当時の紋付や調度品・屏風などが展示されている。



建物名称

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）

建築年 文化7年（1810）（離れば大正時代）

構造・様式 木造入母屋造・瓦葺

所在地 岡山県高梁市成羽町中野2710

電 話 0866-29-2222（成羽町観光協会吹屋支部）

H P 高梁市観光協会（成羽町吹屋地区）

http://takahashikanko.or.jp/modules/spot/index.php?cat_id=5

成羽町観光協会吹屋支部

<https://sites.google.com/site/fukiyakankou/home>

開館時間 9:00～17:00（12月～3月は10:00～16:00）

休館日：12月29日～31日

アクセス JR伯備線 岡山→備中高梁 約50分

→備中高梁駅から定期路線バスで吹屋へ 約1時間

吹屋観光案内所より約4km 駐車場35台あり

高梁市指定重要文化財

備 考

太田家住宅

おおたけじゅうたく

広島県福山市



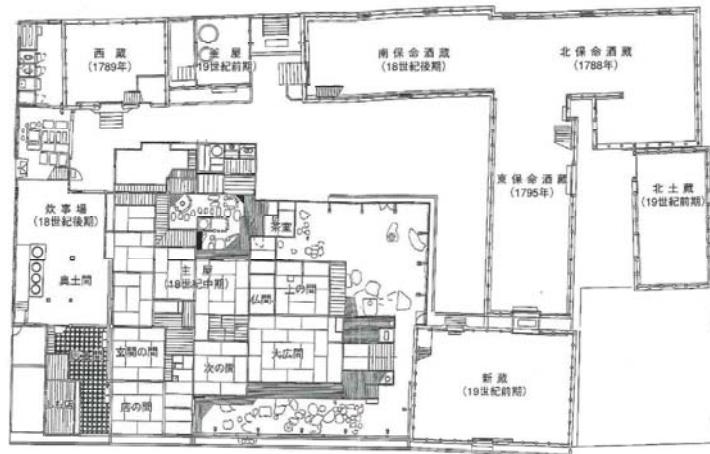
見どころ

蔵と隣接する主屋は、実に美しい日本建築である。小規模な庭園が設けられ、住んでいた人やお客様の目を楽しませる造りとなっている。表の通りからも見える市松模様の土間床は、瓦と漆喰で構成されたモダンなデザインある。天井には網代天井が施され、ハイサイドで設けられた窓は土間レベルから開閉できる装置がついている。蔵の壁にあるナマコ壁は、1や4、5といった数を表現し、まるでサイコロのようである。



太田家住宅は、主屋や保命酒醸造蔵など9棟から構成される。建物の建築年代は、文書や日記、棟札などから、主屋が18世紀中期、炊事場・南保命酒蔵が18世紀後期、北保命酒蔵が天明8年（1788）、西蔵が寛政元年（1789）、東保命酒蔵が寛政7年（1795）、釜屋・新蔵・北土蔵が19世紀前半頃と考えられている。本建物は太田家住宅と呼ばれているが、もとは中村家によって江戸時代中期から後期にかけて家屋敷を購入しながら拡張・増築され、現在の規模となる。明治期になつて太田家が受け継ぎ今日に至る。

保命酒とは、創業者である中村吉兵衛が餅米を主原料に、粳米、焼酎、16種類の漢方薬を使って醸造した薬酒である。宝永7年（1710）には藩から一手醸造販売権を与えられていたが、明治になり専売権がなくなると保命酒醸造業者が増加、競争の激化と共に太田家は製造を終えた。現在、原料や醸造方法は江戸時代とほとんど変わらない。ただしオリジナル中村家の薬味の調合は一子相伝であったため、各醸造元の工夫によって多少味に違いがある。



太田家住宅は、平成3年（1991）5月31日に重要文化財の指定を受けており、平成8年（1996）から平成13年（2001）まで、約6年の歳月をかけて保存修理事業が行われ、屋敷構えとしては最も充実した江戸時代末期から明治時代初期の姿に復旧整備された。四方が道路で囲まれた本敷地であるが、東（見取図の下）の道路の対面に、同じく重要文化財指定を受けた別邸「太田家住宅朝宗亭」が建っている。雁木を独占するように海に面しているため、専用の船着き場をもっていたと考えられる。太田家の一連の建物群は、街区をまるごと占めるような大規模なものであり、鞆の浦の景観形成において重要な役割を果たしている。

参考文献：太田家住宅を守る会 パンフレットより

建物名称	太田家住宅
建築年	18世紀
構造・様式	木造
所在地	広島県福山市鞆町鞆842
電 話	084-982-3553
開館時間	10:00～17:00（入館は16:30まで 火曜休館）
アクセス	JR福山駅南口から鞆鉄バス鞆線で「鞆港」下車、徒歩5分
備 考	国指定重要文化財



「恋しき」は近世の宿場町によく見られる切妻平入りの町家で、伝統的な木造三階建ての旅館建築である。明治5年(1872)に開業し、石州街道を往来する人々が宿泊したが、開業時に建築されたのか、すでにあった建物を用いて開業したのかは定かではない。当時の財界人の一人が旅館名「土生屋」から「こいしき」へと改名したと言われており、「恋」の字がいつごろから使われ始めたのかは不明である。時代の変化に応じて、当時の好みや流行を取り入れながら増改築を重ねており、明治、大正、昭和の各時代が重層していることが特徴である。犬養毅、井伏鱒二など多くの著名人が宿泊しており、田山花袋の小説「蒲団」には恋しき宿泊の記載がある。平成に入り、旅館としての役目を終えることとなったが、平成16年(2004)に登録有形文化財に登録され、現在は「町屋 Cafe & Dining 恋しき」をメインテナントとした観光・商業複合施設として運営されている。

見どころ

泉水、築山を配した本格的な和風庭園が大正初期に築造されている。造園に際して、禅宗の僧侶が主屋の三階から縄張りをしたと言われており、庭園を囲むように5棟の離れが点在し、それぞれに控室や茶室を付した趣のある景色を作り出している。

(離れ「明月庵」(ふじの間)のみ登録有形文化財に指定されていない)



「恋しき」を後世に残していくために、文化財でありながら現状にとらわれず、柔軟にリノベーションを繰り返してきた様子が、随所に見られる。このような保存活用方法は、時代の状況に合わせて再生していくことの大切さをしめしている。



平成19年（2007）と平成24年（2012）と2回に渡り、改修・再生事業が行われていており、「府中の文化、社交の場を後世に残したい」という思いが形となりまちのシンボルであり続けている。

配置図と平面図



参考文献：中国地域のよみがえる建築遺産－新たな命を吹き込まれたレトロ建築の魅力（中国総研・地域再発見BOOKS）

建物名称	恋しき
建築年	明治初期
構造・様式	木造二階建て、一部三階建て
所在地	広島県府中市府中町178番地
電 話	0847-41-5140
H P	https://www.koishiki.com (株式会社 恋しき)
営業時間	8:00～18:00 (不定休)
アクセス	山陽自動車道「福山西IC」から車で約30分
備 考	登録有形文化財

耕三寺潮聲閣

こうさんじちょうせいかく

広島県尾道市



書院造りを基調とした御佛間

潮聲閣は、耕三寺建立が初願される10年前の昭和2年（1927）、耕三師が36歳のとき、ご母堂の為に建築した壮大な住宅で、完成までに約5年の歳月を要した。潮聲閣の名称は、子爵三室戸敬光の撰で表玄関の扁額も子爵の筆になっている。母屋は木造・平屋・入母屋造・桟瓦葺（一部銅板葺）で、洋館は2階建て切妻造・洋瓦葺で車寄せ（ポーチ）が付属している。現在は耕三寺の重要な行事のときに使用されている。

本建物は和洋複合形住宅であり、広島県内でも数例が現存しているが、そのなかでも最も規模が大きく、かつ豪華な例がこの潮聲閣である。特に、日本住宅部分は、独創的で格式の高い書院造りの意匠が用いられ、折上格天井を多様することや名木をふんだんに使うなど、豪華さにおいても秀でており、昭和初期の住宅建築の最高傑作といえる。

見どころ

洋館と日本住宅を複合させた住宅建築は、一般的に洋館が表に位置し、その背後に日本住宅が配置されるが本建築では日本住宅のほうが正面にある。また正式な来客を迎える主室としての大広間よりも、ご母堂の居間である「老人室」のほうが豪華に造られているのは例のないことであり、耕三師の孝心によって造られた特別な住宅であることをよく表している。



潮聲閣の最高格式の座間である老人室



折上格天井で百二十四面の花鳥画が帝展作家山下薰画伯によって描かれている



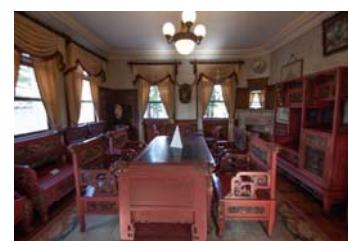
道路に面した洋館部の姿と見学で入れる和館の裏側勝手口



表玄関式台の天井



玄関の間



洋館部分の応接室

表玄関では式台を高欄付の廻り縁とし、玄関の間には一間半もの地袋付の付書院（室内側を華頭窓にし、外側に高欄付の小さな廻縁を設ける）その天井には畳大の一枚板を使い畳割と同じように配置されている。

参考文献：書院潮聲閣パンフレット

建物名称	耕三寺潮聲閣
建築年	1929
構造・様式	木造
所在地	広島県尾道市瀬戸田町瀬戸田553-2
電 話	0845-27-0800
H P	http://www.kousanji.or.jp/
開館時間	10:00～16:00（年中無休）
ア クセス	しまなみ海道「生口島南IC」から車で13分
備 考	国登録有形文化財

旧毛利家本邸

きゅうもうりけほんてい

山口県防府市



旧毛利家本邸として、大正5年（1916年）に庭園とともに完成。ほとんど当時のまま残されおり、国の重要文化財に指定されている。

江戸時代の大名家の御殿建築の流れを汲みつつ、近代的な建築手法を取り入れているのが特徴。柱梁などの構造材は木曽ヒノキ、板戸は屋久杉、また、階段は段板ではなく、ヒノキの一本物がもちいられるなど、厳選された素材とそれらを活かす技術が格式高い邸宅を作り上げている。一階の天井高、階高が高く、二階の窓からは、瀬戸内海を借景に広大な池泉回遊式庭園と防府の街を望む。大正期のガラスを随所に使い、風通しがよく、心地の良い空間。設計・監督は毛利家専属の建築技師原竹三郎、作庭は佐久間金太郎。建物は合わせて12棟、敷地面積は8万4000m²に及ぶ。

二階からの景色

見どころ



一階客室のシャンデリアは特注のドイツ製。高い天井で違和感なく、和風建築にとりいれられている。毛利家の家紋である「長門沢瀉」がデザインされている。



二階客室のシャンデリア。一階応接間や廊下、食事の間などすべてデザインを変える演出がみてとれる。全て当時のもの。



一階の大広間は、最も格式の高い部屋で、折り上げ格天井にシャンデリアのライトも5つと豪華な仕様になっている。当時はすべて邸内の自家発電でまかなっていた。



家紋「長門沢瀉」をさまざまな意匠に工夫した釘隠。



玄関から応接間へつなぐ廊下及び応接間は、木目の美しい台湾ケヤキの一枚板が敷き詰められている。（写真左：一枚板の廊下）

また、接客、居住の表の空間、家政を支える裏方の空間がきちんと分けられており、表の空間の廊下はすべて畳廊下、裏方の空間は、すべて板廊下である。（写真右：庭園に面した畳廊下）

壮大にして落ち着いた雰囲気の近代建築遺産としても貴重な空間である。

建物名称

旧毛利家本邸

建築年

大正5年（1916年）

構造・様式

木造二階建て 書院造り

所在地

山口県防府市多々良1-15-1

電話

0835-22-0001

H P

<http://www.c-cable.ne.jp/~mouri-m/>

開館時間

9:00~17:00（12月22日~31日休館）

アクセス

J R 防府駅から約2.5キロ（車で約8分）

備考

重要文化財

山口市菜香亭

やまぐちしざいこうてい

山口県山口市



山口市菜香亭は、八坂神社境内に料亭菜香亭として明治10年に創業し、平成8年まで営業を行っていたものを、平成15年に移築復元した文化施設。現在残っている建物は、明治20年から昭和11年の間に増改築された部分。床面積は、約1,000m²。菜香亭は山口の迎賓館として使用され、歴史的人物や歴代の総理大臣も訪れており、直筆の書が飾られている。

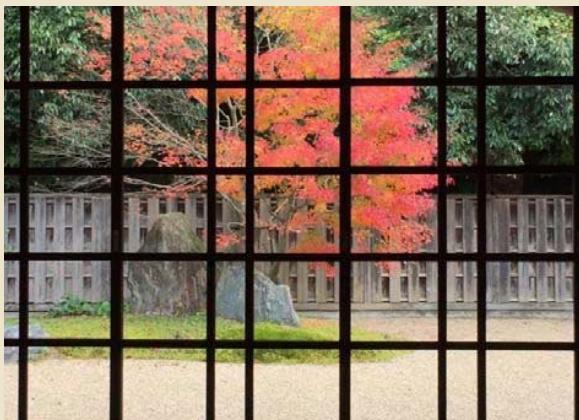
大豆の御汁で磨かれたという黒光りする廊下や、ゆがみのあるガラスなど和風建築の良さを今に残している。

庭は大正時代の池泉観賞式庭園を移築している。

写真提供：山口市

見どころ

大広間の床の間へ向かって右側には板の間の縁側、左側には畳敷きの縁側があり、それぞれ、庭に面している。ゆがみのあるガラス越しに、季節の風景を望むことができ、まるで絵画のようである。窓ガラスは、大正15年にベルギーから輸入されたと思われるフルコール法によるガラス。



写真提供：山口市

約150畳の大広間。歴史的人物の法要や祝宴が催された。戦後はここで結婚式が行われた。

床の間は、大正15年、昭和11年、二時代の意匠を再現しており、床脇に違い棚がなく、床柱の柱身中央部を切り取る形。

大広間のスパンは7,760mmもあり、木トラスが組まれている。建材は一部に明治時代の物をそのまま使用している。大広間は、明治26年ごろ、明治36年ごろ、大正15年ごろに増築を重ねており、その時代によってトラスが技術的に進歩している。その様子を検証できるよう、一部天井がガラス張りになっている。

当時の円卓や食器などが残っており、歴史が感じられる空間である。



大広間より中庭と客間棟を見る

建物名称

建築年	明治20年から昭和11年（平成15年移築復元）
構造・様式	木造二階建て（補強の為一部鉄骨有）
所在地	山口県山口市天花1丁目2番7号
電話	083-934-3312
H P	https://www.c-able.ne.jp/~saikou/
開館時間	9:00~17:00（火曜日、12月29~1月3日休館）
アクセス	J R山口駅からバス「野田学園前」徒歩2分
備考	

金子みすゞ記念館

かねこみすずきねんかん

山口県長門市



金子みすゞは、山口県出身の童謡詩人。

記念館は、「本館」と「金子文英堂」からなる。「金子文英堂」は、金子みすゞの実家である書店を当時の場所に再現したもので、みすゞが童謡を書き始める前の子供時代を過ごしたところ。

表の書店から裏の庭まで、通り土間がある商家のつくり。庭を囲む形で風呂、便所があり、土間の台所と風呂の間に井戸のポンプがありどちらにも使えるように吐出口が回るようになっていた。

通りの雰囲気も昔ながらの風情が残っており、再現された大正時代の書店がなじんでいる。

見どころ



当時、文英堂の隣に造り酒屋があり、裏手に蔵があったことから、記念館は蔵をイメージしたつくりになっている。
梁や入口に古材が使われていて、梁の迫力は圧巻である。

書店から奥をながめる。ふすまをあけ放つと庭が見え奥までひとつづきの部屋となる。



写真提供：金子みすゞ記念館

文英堂二階のみすゞの部屋。格子窓から通りをながめ、行き交う人々、仙崎の潮風、移ろう季節を感じながらすごしたであろう、みすゞの温かいまなざしをうかがい知ることが出来る。この日々の感覚、感情が後の作品に影響していることが感じられる居心地の良い和室。当時の木製家具が再現されており、木のあたたかみと畳の良い香りが、どこか懐かしい、心の落ち着く空間である。

建物名称

金子みすゞ記念館

建築年

平成15年（大正時代の建物を再現）

構造・様式

木造二階建て 鉄筋コンクリート平屋建て

所在地

山口県長門市仙崎1308番地

電話

0837-26-5155

H P

<http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/site/misuzu/>

開館時間

9:00~17:00（12月29日~1月1日休館）

アクセス

J R仙崎駅から徒歩5分

備考

長府毛利邸

ちょうふもうりてい

山口県下関市



長府毛利邸は、長府毛利家第14代当主・毛利元敏公により明治36年に完成した邸宅。城下町長府にあり、近くには功山寺、乃木神社などがあり、まちなかには長屋門や土塀が残っており、当時の風情を今に残している。

武家屋敷造りの母屋は、書院、明治天皇ご宿泊の間、居住空間であった室が残されている。玄関土間部分の天井は格天井、正面には鶴が描かれた板戸があり反対側には雉の絵が描かれている。中庭を囲むように部屋が配置されており、その反対側は庭園に面しているため、風通しがよく、季節の移り変わりを感じられる気持ちのよい空間となっている。庭に面したガラス障子は、歪みのあるガラスで和の趣が感じられる。



正面玄関



庭から見た居住空間

見どころ

長府毛利家の家紋は「一文字三星」と「抱沢瀉」を定紋とし、他に替紋として「董」「五七桐」「十六菊」を用いた。その家紋をデザインした釘隠。



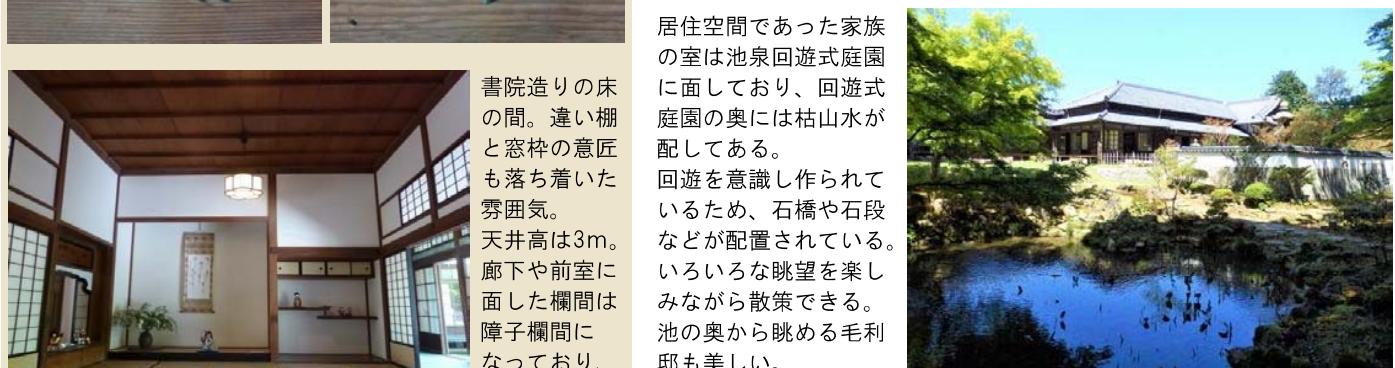
書院庭園は白壁に囲まれ、濡れ縁からの飛び石の配置、手水鉢など、庭自体に風格がある。畳敷きの書院前室に座り、庭を眺めていると、時の流れがゆっくりと感じられる。



書院造りの床の間。違い棚と窓枠の意匠も落ち着いた雰囲気。天井高は3m。廊下や前室に面した欄間は障子欄間にあっており、庭から庭へ風が通るようになっている。部屋と部屋の欄間は各部屋装飾が違い美しい。子供部屋の欄間は松竹梅。



居住空間であった家族の室は池泉回遊式庭園に面しており、回遊式庭園の奥には枯山水が配してある。回遊を意識し作られているため、石橋や石段などが配置されている。いろいろな眺望を楽ししながら散策できる。池の奥から眺める毛利邸も美しい。



建物名称	長府毛利邸
建築年	明治36年（1903年）
構造・様式	木造平屋建て 武家屋敷造り
所在地	下関市長府惣社町4番10号
電話	083-245-8090
H P	http://s-kanrikousha.com/mouriteitop.html
開館時間	9:00~17:00（12月28日~1月4日休館）
アクセス	J R下関駅からバス23分「城下町長府」徒歩10分
備考	

長岡家住宅

ながおかげじゅうたく

徳島県三好市



長岡家住宅は、三好市東祖谷落合集落の重要伝統的建造物群保存地区内にある伝統的建造物（特定物件）の一つで、中腹からやや下腹に位置しており、標高約900mの南斜面に建つ。建築年代は、棟札が残つており明治34年である。当初は同地区内にある喜多家の分家として建築された。脇土居あるいは西土居と呼ばれ、落合集落でも上層農家であったといわれている。当家は、木造平屋建、茅葺の寄棟造で、外壁は、土壁を保護するため、竹を火で炙つてから割つてつぶした（ひやいだ）ものを張るという、祖谷地方に古くから残る工法の「ひしやぎ竹」で仕上げられている。上層農家であったためか、間取りは食達六間取で、祖谷の民家特有のオモテに相当する部屋がなく、かわりに書院と床の間を備えた座敷がある。土間が極めて小さく、通常は平側に設けられる前便所が妻側にあるなど、この地方の他の民家とは多くの点で異なっている。農業だけでなく来客も意識した格式の高さが分かる貴重な建物である。

見どころ

長岡家住宅の茅葺の大きな寄棟と、この地方に古くから残る「ひしやぎ竹」で仕上げた外壁は、祖谷地方特有のものだ。平側に長く伸びる縁側に座り、対岸を眺めてのんびりするもよし、中で板間やタタミに座りゆっくりするもよし。見どころというより、居どころと言った方がしっくりくるそんな建物である。そして建物だけではなく、対岸から眺めてみたり里道を歩いたりして、集落をじっくりと楽しんでもらいたい。



囲炉裏部屋



ザシキ



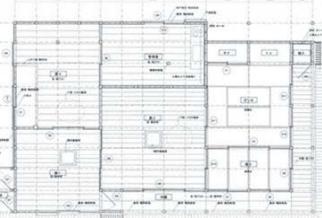
イモ穴



新緑の落合集落

長岡家全景

落合集落は、県西部東祖谷のほぼ中央にあり、祖谷川と落合川の合流地点より山の斜面に沿って、東西約750m南北約850mに広がる。斜面を蛇行しながら上に向かう道路沿いに民家が点在している。集落内を東西南北に走る里道や石垣、田畠、森、そこで住む人々などすべてのことが、この集落を特徴づけている。



長岡家住宅 平面図

対岸の中上地区にある展望所からほぼ全景を一望することができる。集落内には、一棟まるごと貸し切りできる茅葺きの民家が8棟あり、宿泊体験ができるほか、地場産食材やジビエを使った料理を楽しめる古民家レストランもある。



対岸の展望所から見た落合集落

建物名称	長岡家住宅
建築年	明治34年
構造・様式	木造平屋、寄棟造、茅葺
所在地	徳島県三好市東祖谷落合
電話	0883-72-3910（三好市文化財課）
H P	www.miyoshi.j-tokushima.jp （三好市）
開館時間	9:00~16:00（定休：毎週水曜日）
アクセス	車：井川池田IC下車 1時間30分 バス：四国交通「鎖谷」下車 徒歩15分
備 考	重要伝統的建造物群保存地区内(特定物件)

出羽島の民家

てばじまのみんか

徳島県海部郡牟岐町



出羽島は、牟岐港沖約3.7kmに位置する海岸周囲距離約3kmの小さな離島である。島の北部には砂嘴（サシ）に囲まれた入り江があり、入り江に沿って集落が形成されている。島内には自動車の乗り入れは出来ず、アワエと呼ばれる路地が縦横に巡らされ、今でも手押し車が主な運搬手段として利用されている。集落の歴史は1800年に藩令による移住が開始されたことに始まり、江戸時代後期から昭和前期にかけて漁業の隆盛とともに集落も拡大・発展した。島の歴史は常に漁業と共にあり、現在も約70人の島民が漁業を生業として静かな島の暮らしを営んでいる。島への交通手段は、牟岐港から出港する定期船のみであり、高度経済成長期の開発の波にさらされることなく、近世から昭和にかけて形成された伝統的漁村集落のたたずまいをを現在に伝えている。島にはゆったりとした時間の流れがあり、清浄な空気と温かな潮風に包まれてほかにはない特別な旅情を味わうことができる。

港から集落を望む

見どころ

出羽島は、平成29年2月に徳島県3カ所目の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。漁村集落としては国内2例目である。現存する建物群には建造された時代ごとの特徴が見られ、多様な建築様式を縦覧できる貴重な場所となっている。時代が進むにつれて平屋からつしま二階・中二階・本二階と軒高が高くなる傾向があり、また最も特徴的な建築要素として平入り主屋の正面に設けられたミセ造り（上部蔀・下部床几）や出格子を見ることができる。ミセ造りは四国東南部のみに見られる稀少な建築部品で、荒天時には雨戸として使用された。島全体が伝統的漁村集落の佇まいを現在に伝える貴重な文化遺産となっている。島の交流施設として復原された民家『波止（はと）の家』は事前申込みをすれば内部も見学可能である。



出羽島全景



交流施設『波止（はと）の家』
手前に手押し車が見える



『波止の家』内部
通り土間を潮風が吹き抜ける



もっとも特徴的な建築様式である「ミセづくり」と「出格子」をもつ民家。持送りには、家ごとにさまざまな意匠がこらされている。ミセは漁網の繕いや魚を捌く作業台として利用され、時には近所の人との談笑を楽しむ縁台となった。

建物名称

出羽島（てばじま）

建築年 江戸時代後期から昭和初期にかけて

構造・様式 木造平屋・つしま二階・中二階・二階建て等

所在地 徳島県海部郡牟岐町牟岐浦

電話 0884-72-0107（牟岐町教育委員会）

H P tebajima.jp

アクセス 牟岐港から定期連絡船で15分

牟岐港へはJR牟岐駅から徒歩8分

備考 重要伝統的建造物群



吉田家住宅は、吉田直兵衛が寛政四年（1792）に創業した藍商家である。藍商とは、幕末から明治にかけて繁盛した藍染めの原料を販売する商人をいう。建物は、重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」に面していて、間口十一間・奥行き三十間の広大な敷地を有し、母屋・質蔵・藍蔵など五棟が中庭を囲むように建っている。家屋は、本瓦葺きに大壁造りの重厚なたたずまいで、隣家と接する二階の妻壁に卯建を設けている。建物裏手には雁木石段があり、かつて吉野川が近くを流れていたときの名残で、降りてすぐの所が舟着場になっていた。また、家屋の中には、商談に使ったみせのまや帳場があり、使用人部屋や藍蔵、藍寝床なども残されている。移築として建てられた後、江戸後期から慶応元年までの約九十年間に、三度に亘る大規模な改修を行ったと記録されている。現在は一般公開されており、建築様式の素晴らしさや藍商の暮らしを見ることができます。

見どころ

商家の密集する市街地で、人々がもっとも恐れたのが火災である。江戸時代に入ってから、たびたび大火に見舞われた美馬市脇町では、家屋の防火構造が重視され、卯建（うだつ）や虫籠窓（むしこまど）などが造られるようになった。卯建は、隣家と接する二階の妻壁から突き出した、本瓦葺・漆喰塗の小さな袖壁で、延焼をくい止める役割がある。虫籠窓は、表面に練り土・漆喰を塗り込めて堅牢に固めた二階部分の窓で、窓から室内へ火が燃え移るのを防ぐ役割がある。卯建は、作る費用が相当に掛かったことから「うだつがあがる・うだつがあがらない」という、ことわざの語源にもなっている。



重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」は、幕末から明治期まで藍商をはじめ多くの商家が建ち並び、たくさんの人々で賑わっていた。現在は、明治期のものを中心に、江戸中期から昭和初期の八十五棟の伝統的建造物が建ち並んでおり、近世・近代の景観がそのまま残されている。この町並みの大きな特徴は、町家の両端に卯建がみられることであり、このことから「うだつの町並み」の通称で親しまれている。近年では、古民家を活用したセレクトショップやカフェ、ゲストハウスなどがオープンし、毎年「うだつまつり」が開催されている。

建物名称

吉田家住宅

建築年 1792年（寛政4年）

構造・様式 木造2階建・本瓦葺

所在地 徳島県美馬市脇町大字脇町55番地

電話 0883-53-0960

HP <http://www.city.mima.lg.jp/kankou/kankouannai/miru>

開館時間 9:00～17:00（最終入館16:30）

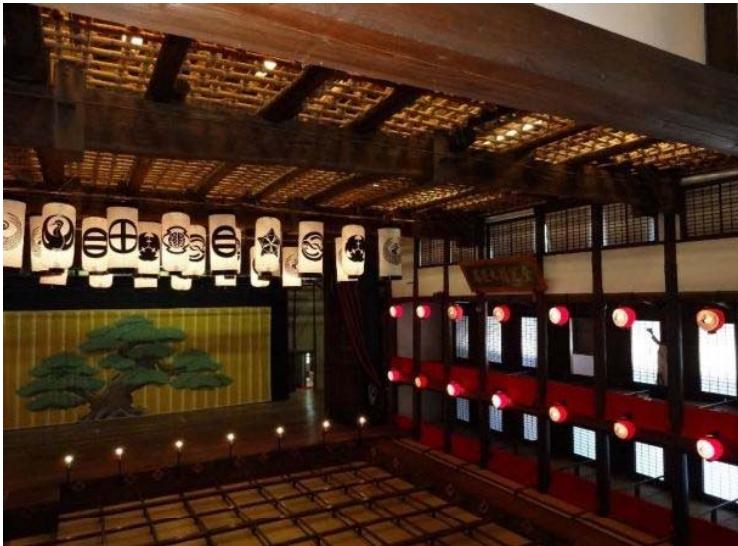
アクセス 徳島市内より車で約40分、脇町ICより車で約10分

備考 重要伝統的建造物群・美馬市指定有形文化財

旧金毘羅大芝居

きゅうこんぴらおおしばい

香川県琴平町



舞台・客席

見どころ

- 【かけすじ】 役者などが宙乗りするための装置。
【明り窓】 開閉することで場内の明るさを調整する。
【顔見世提灯】 興行の際、役者の番付の代わりをしている。
【ブドウ棚】 竹で編んだ格子状の天井。花吹雪も散らすことができる。約500本の竹を使用。



- 【花道】 舞台下手より直角に客席を貫き、鳥屋に通じている。
【すっぽん】 花道の七三の位置にある切穴のこと。
【廻り舞台】 舞台中央にある直径4間（7.3m）の円形に割り抜き、回転させることができる舞台。
【セリ】 廻り舞台にあり、「スライド」式に奈落と舞台を上下できるようになっている。

- 【空井戸】 舞台と花道の付け根に構えた半間四方の空枠。舞台下の奈落に通じており、ここから出入りしたり、早替わりなどに用いられる。

- 【仮花道】 舞台上手より、直角に客席を貫いている。

旧金毘羅大芝居は、天保6年（1835年）に建てられた、現存する日本最古の芝居小屋である。江戸時代中頃から金毘羅信仰が全国的に高まり、多くの参詣客で町は賑わいをみせていたといわれる。

年3回（3月・6月・10月）の「市立ち」の度に仮設小屋で芝居、相撲、軽業、操り人形などの興行が行われていた。

しかし、だんだんに門前町の形態が整ってくるにつれて常小屋の必要性と、また一方その設置を望む多数の庶民の声を反映し、天保6年、高松藩寺社方より許可を契機に、当時、大阪三座の一つ大西芝居（後の浪花座）の規模、様式、構造を模し、富籠（現代の宝くじのようなもの）の開札場を兼ねた常小屋として建てられた。

しかし、時代は移り変わり人々の娯楽の変化とともに近代以降、小屋は映画館と変わり小屋の内部なども様式をえていった。所有者が変わるとたびに芝居小屋の名称は「金毘羅大芝居」より「稻荷座」「千歳座」となり、明治33年に「金丸座」と改名した後は現在でもこの愛称で親しまれている。



正面外観

興行が衰退し廃館となるが、江戸時代より現代に至るまで風雨に耐え火災にも遭うことなく、奇跡的に残った最古の劇場を後世に残すため保存運動が始まり、国内外の建築、演劇に携わる専門家も加わり、芝居小屋を訪れ専門的な調査が行われた。

昭和45年、歴史的、文化的価値が認められ「旧金毘羅大芝居」として国の重要文化財に指定され、昭和47年から4年間の歳月をかけ、昭和51年に現在の愛宕山中腹に移築復元された。

平成15年、復元及び耐震構造補強工事（平成の大改修）が行われた。調査の結果、天井裏全面に鉄骨で構造補強が施され、補強を施すことにより、大梁を支えていた四本の支柱を除去することが可能となり、本来の姿（江戸時代の内装）に戻された。併せて調査中に発見された痕跡を検証し、判明した「ブドウ棚」と「かけすじ」が復元され、より江戸時代の情緒あふれる姿に再現された。

昭和50年度の移築大改修以後、昭和60年から毎年「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催され、四国路に春を告げる風物詩となっている。

建物名称	旧金毘羅大芝居 通称「金丸座」
建築年	1835年(天保6年)、1976年(昭和51年)移築
構造・様式	木造 一部鉄骨/木戸、客席、舞台、樂屋等複合建造物
所在地	香川県仲多度郡琴平町1241
電話	0877-73-3846
H P	http://www.konpirakabuki.jp/index.html
開館時間	9:00~17:00 (年中無休)
アクセス	JR琴平駅・琴電琴平駅より車で5分、駐車場無し
備考	国指定重要文化財 昭和45年6月17日



京阪にまで聞こえた数寄屋大地主、「揚家十茶室」より譲り受けた五室の茶室と伝承の「鯰魚庵」を合わせて名席六室をもつ大邸宅。



腰掛け待合から見た雀巣庵

見どころ

渡邊邸は明治中期から昭和初期にかけて揚家より移築された五つの茶室を併せ持つ。そのこだわりたるや「揚家を語らずして讃岐の茶室を語るな」という言葉が残されるほど。屋敷の一番北側にあるのは三畳台目の「孤月」と二畳半の「白雲軒」。隣接する鯰魚庵の入り口を腰掛け待合に見立てている。孤月には江戸初期の大名茶人である遠州の書いた「孤月」のぬれ額が鬼瓦下の破風にかかっていることでこの名があるのだそう。軒下には吉原灯籠。軒回りの垂木は北山杉。野地は黒部。柱は法隆寺の残木だそうで驚きである。内露地には織部焼のエメラルドグリーンの敷石があしらわれ、ふと目をあげると母屋との廊下には波模様のかげろう窓が美しい。天井は屋久島杉、竿は栗のなぐり、お点前天井はトクサ。縦がシナ紋竹、横が高野竹といった具合に細部にわたり、こだわりの逸品で構成されている。文献によると孤月は金比羅に抜け参りにきて揚家に滞在した表千家十一代碌々斎（ろくろくさい）が揚硯堂氏の求めに応じて自ら揮して建てた名作だという。大変由緒深く、美しい建物であると共に、そこから醸し出される本物がもつ侘び寂びの素晴らしさが体感できる希少な建築物である。



写真右奥は櫛窓の席。にじり口の上に寒竹の櫛窓があるのでこの名が生まれている。長四畳逆勝手、かべ床、丸炉があるので「丸炉の席」ともいう。大茶人揚氏の「櫛窓の席」は通路を仕切って有効に利用するという間取りの妙を垣間見せてくれる。



孤月内部



孤月外観



内露地

建物名称

渡邊邸
明治中期（築約120年）～昭和初期（築90年）

木造数寄屋造

所在地
香川県木田郡三木町下高岡2569-1

電 話
090-1572-7877（渡邊邸オーナー小橋様）

H P
<http://www.watanabetei.net>

開館時間
不定休（要事前予約）

ア クセス
ことでん長尾線「白山駅」徒歩約7分

備 考
mail : ayami@watanabetei.net

香川県文化会館

かがわけんぶんかかいがん

香川県高松市



外観



エントランスホール

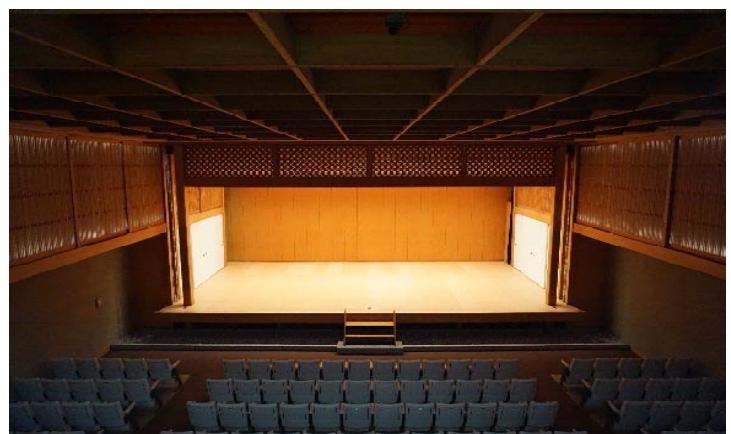
見どころ

香川県文化会館は、鉄筋コンクリート造の近代建築の様式美に、館内の随所に檜、杉、松を取り入れ、日本建築の伝統美を融合させた建築である。50年を経た木の美しさが飴色となってすっかり馴染んでいる。特に4階部分（和室、茶室、談話室）は比較的伝統的な手法を基本とし、建築的な扱いは厳密に木造作構成の手法で統一している。

公共のオープンスペースでありながら、木の扱いをここまで部分・細部にまで厳しく追及したインテリアの構成は必見である。

大江宏氏は新建築の中で、明治以降公的な生活の場は「洋風」で進歩的、私的生活の場は「和風」で退廻的あるといった固定概念が社会通念となっていったが、どれをとっても先進、どれをもって保守とするような格差優劣は本来存しえないという前提にたちもどり、異質の要素が混在する日本の現実をそのままに反映しようとするところに建築創造の意義を見出そうとしたと語っている。（混在併存）

見学の際は、細部の納まりや素材のこだわりに注目して堪能していただきたい。



3階芸能ホール

古さを感じさせずどこか時代を超えた存在感を漂わせている舞台は、能舞台をアレンジしたもので、上部の透かしは銀杏の模様になっている。南側の木の壁面は吸音と装飾を兼ねて鎧（しのぎ）という作り方。天井は、桐の格子天井に、正倉院裂の獅子狩り文様を模して龍村美術織物（株）が織ったものを組み合わせている。



4階談話室（奥には和室が見える）

軒下は梅（つが）の木を使用。軒は、当初桧皮葺（ひわだぶき）だったが、後に銅板に改修している。中央の炉は、周囲が大谷石で中に那智石が敷き詰められている。



4階和室

建物名称	香川県文化会館
建築年	1965年（昭和40年）
構造・様式	鉄筋コンクリート造・地下1階地上7階
所在地	香川県高松市番町一丁目10番39号
電話	087-831-1806
H P	http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/bunkakaikan/
開館時間	午前9時から午後5時まで
アクセス	JR高松駅から南へ1.5km ことでん瓦町駅から西へ1.2km
備考	近隣に駐車場（有料）有り



中心市街地「本通」に面した正門と出桁造の玄関棟

見どころ

伝統的な意匠を持つ玄関棟・主屋と近代和風的な意匠を備えた数寄屋風の書斎・書院・離れの和館に加え、大正～昭和初期の意匠を持つ建築当時の先進的な工法であるRC造を半地階部分に採用したスキップ・フロア形式の洋館、また個人の住宅としては珍しい大型の煉瓦倉庫等、多様な意匠の建築・構造物を楽しむことが出来る。



主屋と大広間を繋ぐ廊下や、中庭に接する広縁の天井は、隣接する室との調和が図られた様々な意匠が楽しめる。



離れた和館は、戸袋も含め、全面ガラス張り。2階の「えじぶとの間」は、明り先障子、欄間にえじぶと文様が施され、

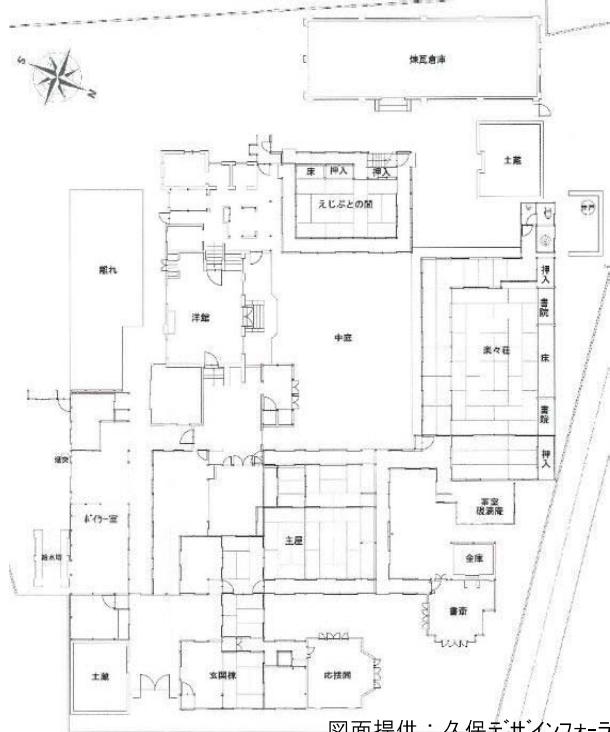
妻折れ格天井の畳の間に異国の雰囲気が取り入れられている。中庭に面する広縁の意匠は、欄間、欄干、床共に幾何学模様で構成されている。糸ガラスで織りなされた欄間の匠さには目を見張るものがある。



ゲストルームは、木造中2階建の洋風建築。外壁はモルタルスタッコ塗りの壁にステンドグラスをはめ込んだ窓、装飾金物のついた暖炉用煙突及び軒先・けらばには装飾を施したブロンズのカバーモールを使用している。内部は、漆喰リーフ格天井や大理石製のマントルピース、幾何学的な分割が見られるアールデコ調のステンドグラスなど、色彩豊かにコーディネイトされた特注の内装材が数多く使用され、贅を尽くした内容となっている。

金毘羅参道の玄関口であり、廻船業の根拠地として栄えた多度津町に位置し、「多度津七福神」と呼ばれた実業家の一人であり、貴族院議員でもあった合田氏の邸宅である。

広い敷地内に大正から昭和初期にかけて建てられた計13棟の建物が現存する。



図面提供：久保デザインフォーラム様

東の本通りに面して土蔵・正門・中2階で黒漆喰塗り出桁造の玄関棟と洋風の応接室が並列する。

中央に位置する中庭を取り囲むように、主屋、書院、洋館のゲストルーム、2階建ての離れが配し、家人とゲストが外部から隔離された私的空间を楽しめるよう趣向が凝らされている。

敷地南側には、ボイラー室や物置を備えた作業空間、西側にはレンガ倉庫、土蔵の収納空間といった、多棟建築ながら明確なゾーニングの敷地構成が成されている。



漆塗りの折上げ格子天井を伴う大広間

北原白秋が「樂々荘」と命名した30畳の大広間。中庭を隔てて洋館と東西に対する。シャンデリアは合田家の家紋である片喰を金具に施した別注品。中央に3畳の畳床。床脇にはケヤキの一枚板を使用するなど、良質な木材が多用されている。

資料提供：合田邸ファンクラブ様

建物名称	合田邸
建築年	大正～昭和初期（多棟建築による）
構造・様式	木造・入母屋造り、RC造、レンガ造等
所在地	香川県仲多度郡多度津町本通1-5-2
電話	090-7785-7573（合田邸ファンクラブ代表泉川様）
H P	https://www.facebook.com/goudatei/
開館時間	事前問合せによる
アクセス	JR多度津駅から徒歩10分
備考	

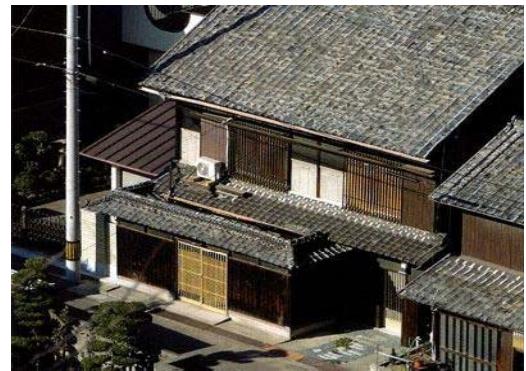
古民家ステイ 香露軒

こみんかすてい こうろうけん

香川県仲多度郡



玄関から眺める



外観

見どころ

二階は10帖と4帖の続き間がある広間と6帖の和室が2つある。続き間の欄間には竹割りで装飾されている。基本的に各室共、天井・鴨居・柱に至るまで杉の糸目柾の仕様で見応えがある。広間にある床の間の床柱は丸柱で、付書院は細やかな格子と組子でできている。障子にも同じく細やかな仕事がなされており、障子の桟は1分厚で、意匠性がとても高い。窓面からは外の光を優しく室内へ入れてくれる。窓には中庭を見渡す事が出来る肘掛け欄干があり、とても風情がある。

階段のすぐ横に6帖の和室があり、他の和室には見られなかった節入りの柱が一本ある。このことから、客人は使用せず、芸子などの控え室として使用し、階段奥の渡り廊下を渡り、広間へと入ったと思われる。

一階・二階共に格式が高いわけではないが、遊び心のある意匠でつくられている。だが、細部にまで細かな仕様を取り入れており、当時この地域には無いであろう手法などが使われている為、お金をかけて作られていることが分かる。



広間の天井



階段



中庭



二階 主広間

多度津町は北前船の寄港地でもあり、江戸期から商人が行きかう港町として発展した。鉄道・銀行・電力の発祥地ということもあり、商人が裕福であり数多くの大邸宅や町家が存在した。現在は多くの建物がなくなったが、当時のままの姿を残している建物が比較的残っている。香露軒はその中の一つである。門を構えている町屋で大阪ではよくある建て方で、そのたたずまいから高級な町屋・屋敷の趣きのある町屋で、中西讃では珍しい建て方だと思われる。また、厨子二階（つしにかい：明治期に建てられた二階が低い建築）では無く、本二階の造りであることから、大正期から昭和初期に築造されたものではないかと思われる。外観は二階の腰壁部分に塗りがあり、扇の意匠が施されている。近隣の建物もよく似た塗りがある建物がある。玄関から内部を眺めると、中庭が垣間見える。玄関奥の8帖和室は松梁を使用しており、天井は張られていない。細やかな造りではない為、家人が使用していたと思われるが、料亭であったことから待合としても使用していたと思われる。また玄関すぐ横には襖で隠してある第二の階段があり、客人への配慮として使われていたと思われる。料亭を閉めた後は住宅として使用され、現在は最小限の改修はしたもの、その趣きはそのままにゲストハウスとして再生・利活用している。静かな町で古き良き時代の空間をそのまま感じる事ができる施設となっている。

建物名称	古民家ステイ香露軒
建築年	大正期（築約100年）
構造・様式	木造二階建
所在地	香川県仲多度郡多度津町西浜1-15
電話	090-7144-6803（おいでまい町家プロジェクト生田様）
H P	http://www.korouken.com
開館時間	不定休（要事前予約）
アクセス	J R 多度津駅 徒歩15分
備 考	宿泊及びイベント貸出可

常信寺庫裏

じょうしんじくり

愛媛県松山市

道後温泉本館にも程近い常信寺（天台宗）は、松山藩主初代松平定行が松山城の鬼門守護のため東京上野寛永寺になぞらえて、天海僧正弟子憲海を開山として1650年（慶安3）に建てたものである。



北側座敷



北側座敷

見どころ

本堂、庫裏、元三太子堂、観音堂、鐘楼などの建物が建ち並び、寺院としての佇まいを見せてている。

桜の時期は特に素晴らしい、俳句の吟行で訪れる人も多い隠れた古刹である。

境内の東に位置する庫裏の屋根は南北軸の寄棟で、どっしりとした風格を感じられる建物である。

内部は北側に続きの座敷があり、西側には玄関を中心とした和室が続く。

東側はプライベートな空間となっている。和室は連続した大空間にもなるが、区切っても使える工夫がしてある。

長押の上や床の間に間接照明を設け、柔らかな和の空間を演出している。

境内には松平定行公の靈廟（県指定史跡）がある。本瓦葺きの入母屋造り妻入りの建物で、唐破風をもつ江戸時代初期の代表的な靈廟建築である。

その東隣にひっそりと建つ、弟定政公の靈廟（県指定史跡）と共に藩政時代の松山藩を物語る貴重な遺構といえる。



西側和室



廣縁から庭を望む



女子便所



男子便所



庫裏全景



建物名称	常信寺庫裏
建築年	明治後期
構造・様式	木造 桟瓦葺き (285m ²)
所在地	松山市祝谷東町636
電話	089-943-5623
H P	
開館時間	問い合わせ必要
アクセス	伊予鉄道市内電車道後温泉駅徒歩10分 駐車場有
備考	



上之間

見どころ

建物は平屋建て、入母屋造妻入りで、玄関式台部分にむくり破風の屋根がかけられている。

間取りは、北側の玄関式台から「三之間」（10帖）に入ると「次之間」（10帖）、「上之間」（15帖）と二間半の間口で一列に三室が並んでいる。

三室はそれぞれ床の間を持っている。

三之間は床の間のみで、床板には見事な桙の一枚板が使われている。

上之間は本格的な床の間で、床脇は北端に地袋のみで、床板には松の鏡板が張られている。床の間は框が漆塗りの畳床で、桙無節の四方柱の床柱は建物全体のレベルを象徴するかのような逸品である。

次之間の床脇は天袋と地袋のみで、地板を張らず畳敷きとなっている。

建具や欄間、その他細部の意匠や納まりにも携わった大工の丁寧かつ精緻な仕事がうかがえ、建築技術の高さを物語っている。

また、移築時に見られがちな傷や痕跡の埋め木などがほとんど見られず、見えがかり部分の仕口等にも隙間がほとんど見当たらない事からも、精緻な仕事ぶりがうかがえる。



この建物は、創建年代や来歴は不明だが、旧小松藩の萩生村（現在の新居浜市中萩）庄屋飯尾家の屋敷から明治30年頃現在地に移築されたものと伝承されている。

現在は地元の製紙会社の別邸となっている。

先代社長が戦後間もなく購入された後は、ご親族の結婚式や銀婚式などの慶賀の会に使用されただけだった。

経年劣化による雨漏りなども進行し、痛みが激しかったが、平成11年に屋根の全面葺き替え等、原形を留める形で補修された。

近代的な建物に建て替える計画もあったそうだが、地方の貴重な文化遺産でもある和風建築を残そうとの意志で保存された。



三室を望む



次之間



障子



違い棚



欄

建物名称	古今荘（旧飯尾家客殿）
建築年	明治初期
構造・様式	木造 入母屋造妻入り（218m ² ）
所在地	四国中央市川之江町141番地4
電話	0896-57-2200 （管理者）丸住製紙株社長室
H P	
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR川之江駅徒歩20分 三島川之江ICから約3km
備考	

木屋旅館

きやりょかん

愛媛県宇和島市



夜外観

木屋徳右衛門の二代目木屋徳三郎が明治44(1911)年
堀端通りの現在地に商人宿として旅館「木屋」を開業

当時の宇和島は、明治以後急速な産業、文化の発展に伴い、追手町通りや袋町を中心に繁華街が形成され、「融通座」という芝居小屋が追手町通りにあり、商業客はもとより役者や歌手などの芸人も多く宿泊した。

所在地の堀端通りは、宇和島城の堀が埋め立てられた土地で、すぐ近くに追手門(国宝、戦災で焼失)があつたが、現在は大きな石碑のみ残っている。



夜外観

見どころ

この旅館は木造二階建、切妻造り、平入り、棟掛け瓦葺き延べ面積559m² (169坪) の、つし造りである。正面から見る外観は、1階は連子格子窓と犬矢来と、2階は硝子窓が連なり、風情のある佇まいを醸し出している。創建当時の写真には、建物の前に小川が流れ、その前には柳の木がある独特な風景が写っている。

客用玄関前の軒先には、創建当時の門灯が残っている。玄関を入ると取り次ぎの板間になる。板間横には、客間して和室8帖2部屋と4帖1部屋がある。3部屋共床の間の構えがあり、会議室や宴の部屋に使われている。この客間と板の間からも中庭と宇和島城が見える空間になっている。

主として1階は旅館に必要な機能を備えた部屋を配置している。調理室、風呂場、ボイラー室等がある。また、1階部分に車庫があるが、創建当時は人力車置き場であった。従業員が使用していた玄関には、宴が盛り上がり旅館に泊まったお客様が、早朝人力車に乗るために用の小さな板戸があり、現在も残っている。

2階の間取りは、表通りに面して縁を設け、客室には8名まで宿泊出来るようになっている。客室の前に廊下、その外にも廊下が二重に設けられて掃き出しの硝子窓となっている。創建当時は建具は無く、雨戸のみとなっていた。外側の天井は主屋根の勾配で、その部分のみ天井が低く、屋根は銅版一文字葺きである。

2階北面端にある部屋は、常連客の司馬遼太郎が宿泊する時に使用された部屋が今の残っている。この部屋からも城山や1階の中庭も望められる造りで、北面壁には、茶事に使われる小さな花瓶掛け用の沈め釘や床板に類する構えも残されている。

表の外観は創建当時の景観が残されており、宿泊客や市民に慕われる建物になっている。



玄関ホール



夜外観



2階廊下



客間



客間



客間



建物名称

建築年

構造・様式

所在地

電 話

H P

開館時間

ア クセス

備 考

木屋旅館

1911年（明治44年）

木造2階建 土葺き (559m²)

宇和島市本町追手二丁目8-2

0895-22-0101

<http://www.kiyaryokan.com/top/>

問い合わせによる

JR宇和島駅徒歩15分

国登録有形文化財（建造物）平成26年指定

岡御殿

おかごてん

高知県安芸郡田野町



岡御殿 外観

見どころ

岡御殿は天保15年(1844)に建築され、平成9年(1997)に修復工事が行われた。八畳の上段の間を中心に鞘(さや)の間、湯殿(ゆどの)、砂雪隠(せっちん)などがあり、当時の本陣の様子がよく理解できる。

特に上段の間は身分の違いを表現するために他の間より床が一段高くしつらえられ、藩主が座る位置から庭を望むと、座敷や縁の柱がピタリと一本に重なり、最も美しい庭の眺めを望むことができる。



上段の間から庭を望む

優美なこけら葺き屋根に加え、軒下を覗くと化粧の扇垂木が軒下空間に格式高い印象を与えていている。

また三尺の廻廊によつて奥行きのある贅沢な空間のしつらえを感じることができる。

廻廊

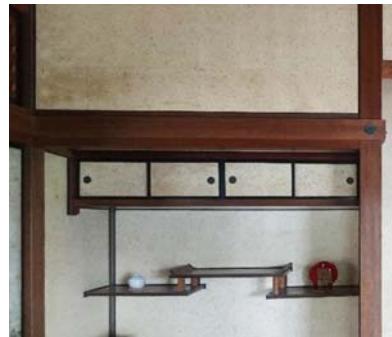


扇垂木



【 上段の間 】

上段の間には付け書院と違い棚があり、壁は貼り付け壁(土壁の上に紋様を刷り上げた和紙を袋貼りにした襖の様なパネルを入れた二重壁)で、さらにその周囲に黒漆塗りの四分一(しぶいち)とよぶ木製の細枠が回されている。格子欄間も繊細な造りで、また長押の釘隠しも銅板を一つ一つ彫金した優美な装飾となっている。



違い棚と貼り付壁



格子欄間



釘隠し



建物名称

岡御殿

建築年 1844年(天保15年) (1997年(平成9年)修復)

構造・様式 木造平屋 書院造り 入母屋造り こけら葺き

所在地 高知県安芸郡田野町2147-1

電話 0887-38-3385

H P <http://www.chugei.or.jp/tano/tourism/tourism-551>

開館時間 9:00~16:30 (火曜休館(祝祭日はその翌日))

アクセス 土佐くろしお鉄道田野駅~歩徒約7分 南国ICから約1時間

備考 高知県保護有形文化財(建造物) S60年4月2日指定

竹林寺書院（客殿）・庭園

ちくりんじしょいん(きやくでん)・ていえん

高知県高知市



書院 西庭より庇を見上げる

見どころ

文化13年建築当初の姿を保つ竹林寺書院は、正統的な書院建築の形式を遵守しており、当地方においては江戸時代後期の建築物としては稀有な存在といえる。これは藩主山内家の祈願寺として火災後の復興にあたったためとみられる。高知城本丸御殿を模したと見られる意匠があること、また玄関や書院大棟に山内家の家紋があることもそれを裏づけるものである。



玄関上部、襖引手等に柏三つの家紋が確認できる

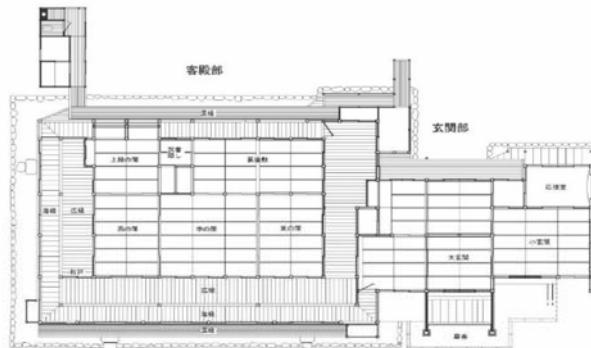


欄間には家紋の柏をモチーフにしたもののが見られる



書院内部から北庭を望む

高知市の南方五台山上に在する竹林寺は、四国八十八カ所靈場第三十一番目に数えられる信仰の地である。本堂は当地方の中世折衷様建築の代表事例として国の重要文化財に指定されている。書院は竹林寺の山門北側に位置しており、高知県下を代表する大規模客殿として、2016年(平成28年)に国の重要文化財に指定されている。



書院 平面図

【書院】

書院は、寺蔵文書である「災害後金色院記」によれば、1808年（文化5年）に焼失し、1816年（文化13年）に再興されたとある。建物は南面して建ち、東側の玄関部と西側の客殿部で構成される。玄関部は、桁行12.8m、梁間7.9m、切妻造、銅板葺、正面に車寄せ付きの式台玄関をもち、車寄せは向唐破風造、銅板葺とする。客殿部は、桁行20.2m、梁間14.3m、一重、入母屋造、銅板葺である。濡縁および雨戸仕舞に若干の改造がみられるものの、間取りはほぼ当時の姿を保っている。

【庭園】

庭園は書院の周辺に展開し、大きく三つの部分より構成される。第一は書院に南面し、前庭を成す区域である。第二は書院の西南面から西面にかけての区域、第三は書院の西面及び北面にかけての区域で、ともに竹林寺庭園の主たる部分を成す。背後に迫る傾斜面とその前面のわずかな平坦地を利用して造られ、平坦地には傾斜面とその裾部から湧き出る希少な水を集めて池が掘られている。特に西庭では、護岸を石段状の直線的意匠とすることにより水面を軒先近くにまで引き寄せ、狭隘な水面に広がりを持たせている。庭園は史跡名勝天然記念物に指定されており、また建物と一緒にすることで高い価値をもつものといえる。



南庭から書院を眺める

建物名称	竹林寺書院（客殿）
建築年	1816年（文化13年）再興
構造・様式	木造平屋建て・入母屋造など
所在地	高知市五台山3577
電話	088-882-3085
H P	http://www.chikurinji.com/
開館時間	8:00~17:00
アクセス	高知駅からMY遊バスで26分
備考	書院：国重要文化財 庭園：国史跡名勝天然記念物

五藤家安芸屋敷

ごとうけあきやしき

高知県安芸市



住宅を南側庭園から望む

五藤家は、尾張黒田（愛知県一宮市）の出身で、山内一豊の先代の時代から家臣として仕えた。関ヶ原の戦いの後、一豊と共に土佐へ入国、安芸城を預けられ、高知県安芸市土居に居を構えた。

江戸時代には土居（土塁）内に家老屋敷が幾棟も建っていたが、1869年（明治2年）にすべて取り壊された。

現在の安芸屋敷は1887年（明治20年）代以降に、別邸として土居跡に建てられたものである。南の座敷3間を取り巻くように、東から南へ廻り縁があり、庭を見渡すことができる。



全体平面図

見どころ



多種にわたる境界塀

6畳+8畳の座敷には、質素に見える欄間があるが、良く見ると1間1枚の板を切り抜いたもので、細かい細工が施されている。また、天井は高いが質素に徹した武家屋敷らしく「雲長押」が設けられていない。

この座敷は、申し込みをすれば無料で借りることができ、地域の発表会などに活用されている。



職人の技が光る欄

●注目！！遊び心あるディテール●



玄関横にある金庫
ダイヤルは「いろは」



離れへ通じる廊下のドアノブ
座金が桜の形

2012年（平成24年）、五藤家を中心とし安芸市・土居郷中が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。この武家屋敷群の特徴は生垣や石垣、瓦積みなどによる塀の造りに依るところが大きい。特にウバメガシや土用竹の生垣は、土佐では武家のみに許されていたといわれている。五藤家を訪れる際は、まちなみの散策も欠かせない。

G.L.

【廻り縁】

1本の丸太桁で組まれている。建具はすべて木製で透明の磨きガラスを携えている。（数枚は損傷しており、入れ替え済み）



廻り縁天井を見上げる



廻り縁からの庭

【玄関】

明治になってから建替えられたが、その様は「武家屋敷」らしく質素である。その中で、玄関間にある杉戸には立派な馬の絵が描かれており、質実剛健の中で際立つ装いである。



立派な馬の絵が楽しめる

【台所】

1898年（明治31年）に増築された台所は、土間やダイドコロが当時のまま残されており、その頃の生活様式がうかがえられる。



歴史感じる土間



建物名称 五藤家安芸屋敷

建築年 明治29年

構造・様式 木造（寄棟）平屋建・武家屋敷

所在地 高知県安芸市土居跡

電話 0887-34-3706（安芸市歴史民俗資料館）

H P <https://www.city.aki.kochi.jp/rekimin/index.html>（上記資料館）

開館時間 9:00～17:00（土曜日、日曜日のみ）

アクセス 土佐くろしお鉄道安芸駅～タクシーで5分、南国IC～約50分

備考 国登録有形文化財（2008年（平成20年）指定）

土佐山田の舎

とさやまだのや

高知県香美市



通り土間

【貫通するブロック塀】

元々商店であった1階の中央に、柱と柱を縫うよう貫入するコンクリートブロック塀は、パースペクティブの効いた通り土間をつくり、建物奥へと視線を誘う。

*撮影：西森秀一

見どころ

最初の改修が行われた1990年は、バブル景気の末期であり、民家再生の仕事はまだ少ない時期であった。古い建物を改修する場合、新しく追加する材も古色に塗っていたが、ここではあえて、新しい材はそのままの色とし、古い材に対峙させている。歴史と現代の融合を試みる中で、建物を貫通する「コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ」が誕生した。後に増築した渡り廊下は、タテハゼ葺きの屋根にいぶしの丸瓦を被せており、和の景観になじみつつ軽やかなデザインとなっている。



コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ



聖瓦棒葺き*

土佐山田の舎は、再生した古民家と増築したギャラリー、それを結ぶ渡り廊下で構成されている。建物は、大きく二度の改修を経ており、設計者はそれぞれ再生、再々生と呼んでいる。一度目の再生は、明治29年建築の町屋を、1990年に設計事務所兼ギャラリーへと改修したもの。2000年には国の登録有形文化財に指定された。2002年の再々生では、古民家の裏手にギャラリー棟を増築し、現在の骨格となつた。その後も外観を変えない程度に、小さな改修を重ねながら、建物を活用している。



北側外観

【外観】

原型は、つしま2階の一般的な町屋(商家)のつくりであったが、再生にあたり、車寄せのために道路側の下屋を撤去している。また、構造体がこれ以上劣化しないように、木製ガラス建具で保護している。



茶室

【茶室】

コンクリートブロックの部屋内側は、床の間付き4畳半の現代的な茶室となっている。押入の柿渋紙張り襖は年月を経て、皮革のような趣を出している。

【ギャラリー樹下の舎（こしたのや）】

一度目の再生により生まれたギャラリーの拡大が望まれたため、再々生として、樹齢100年超の金木犀の樹の下に、ギャラリー空間を増築し、渡り廊下でつなぎだ。



ギャラリー樹下の舎*



渡り廊下*

建物名称

土佐山田の舎

1896年(1990年,2002年改修)

木造二階建て・つしま二階十木造平屋

所在地 高知県香美市土佐山田町東本町5丁目2-11

電話 0887-52-5104 (聖建築研究所)

H P <http://www5d.biglobe.ne.jp/~hijiri-a/>

開館時間 10:00-17:00 (土日：事前予約制)

アクセス JR土佐山田駅徒歩7分 駐車場有

備考 登録有形文化財 (H12年9月指定)